

(1) 本文は端塞・風俗文選等に出づ。今風俗文選による。許六が江戸から歸郷する時、餞にした文。

八 柴門の辭

(2) 元祿五年。

去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別を惜しむ。其の別にのぞみて、ひと日草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其の器、畫を好み風雅を愛す。予こゝろみに問ふ事あり、畫は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其の學ぶ事二つにして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥づといへれば、品二つにして用一なる事感すべきにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入り、筆端妙をふるふ。其の幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用ふる所なし。たゞ釋阿・西行のことばのみ、かりそめにいひ散らされしあだなるたはぶれごとも、哀なる處おほし。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかもかなしびを添ふると、のたまひ侍りしとかや。されば此の御言葉を力とし、其の細き一すぢをたどり失ふ事なかれ。猶古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅もまたこれに同じといひて、燈をかゝげて柴門の外に送りて別るゝのみ。

(1) 本文は末若葉・笈日記・風俗文選等に出づ。今末若葉による。嵐蘭は肥前島原の城主板倉侯の臣。主家没落の後江戸に住んだ。

九 悼嵐蘭詞

(2) 中庸「衽金革死而不厭、北方之強也」
(3) 論語、雍也篇「質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子」。原文「文質片ならざる」とあるのを、笈日記・風俗文選には「偏」に改めてある。今これに従ふ。

(4) 元祿六年。

(5) 笈日記・風俗文選には「七歳の稚子」

金革をしきねにして、敢へてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は義を骨にし、實を膈にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間に遊ばしむ。予ちなむ事十とせあまり九とせにや。此の三とせばかり、官を辭して岩洞に先賢の跡を慕ふといへども、老母を荷なひ、稚子をほだしとして、未だ世波を出でず。されども榮辱の境に居らず、日々風雲に坐して、ことし仲秋中の三日、由井・金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳き、其の歸るさより心地なやましようして、終に息絶えぬ。二十七日の夜の事にや。七十年の母に先だち、七歳の子におもひを残す。いまだ惜しむべき齡の五十に足らず、公のためには腹押切りても悔ゆまじき器の、はかなき秋風に吹きしをれて、草の袂のいかに露けくも口惜しうもあるべきと、今はの時の心さへ知られて悲しきに、母の恨はらからの嘆、親しきかぎりは傳へ聞きて、ひとへに親屬の別に同じ。ことし睦月の末ばかりに、稚子が手を取り予が草庵に

(1) 晋書・王戎傳「戎眼爛々如_二巖下電_一」。後日記・風俗文選には「かの」二字なし。

(2) 源氏物語奥入「ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける」

(3) 杜甫、春日憶李白「渭北春天樹、江東日暮雲」。この詩句により暮雲は友を憶ふ情に託していふ。

(4) 本文は雪丸げ・和漢文操・思亭等に出で、初稿と定稿との二種の文を傳へてゐる。今和漢文探所載定稿の文による。元祿七年作。

(5) 徒然草「よき細工は少し鈍き刀を使ふといふ。妙觀が刀はいたく立たず」。妙觀は攝津勝尾寺の觀音の像を刻んだ僧。

(1) 蘇東坡の畫に竹笠を冠り驢馬に騎つた姿が多い。
(2) 古今集「みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」
(3) 詩人玉屑「笠重吳天雪」

(4) 宗祇の名高い句「世にふるもさらに時雨のやどりかな」による。

來りて、彼に號得さすべきよしを乞ふ。かの王戎¹五歳の眼ざしうるはしければ、戎の一字を缺きて嵐戎と名づく。その悦べる色今日のあたりを去らず。生ける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はとしのばるゝ習ひ、まして父の如く、子の如く、手の如く、足の如く、年比なれむつびたる佛の、愁の袂にむすほほれて、枕も浮きぬべきばかり也。筆を取つて思ひをのべんとすれば才拙く、いはんとすれば胸ふさがりて、只おしまづきにかゝりて夕の雲に向ふのみ。

秋風に折れてかなしき桑の杖

一〇 澁笠の銘並序

草の扉にひとり侘びて、秋風寂しきをりく、竹取のたくみにならひ、妙觀⁵が刀をかりて、みづから竹を割り、竹を削りて、笠作りの翁と名のる。心靜かならざれば日ふるに物うく、工拙⁶ければ夜を盡して成らず。且に紙を重ねたべに干して、また重ねく、澁といふ物をもて色をさはし、ますく堅からん事をおもふ。廿日過ぐる程にこそやゝいできにけれ。其の形裏の方にまき入り、外さまに吹きかへりなど、荷葉

の半ば開くるに似て、なかくをかしき姿なり。さらばすみかねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし。西行法師の富士見笠か、東坡居士の雪見笠か、宮城野²の露に供つれねば、吳天³の雪に杖をや曳かん。霰にさそひ、時雨にかたむけ、そゞろにめでて殊に興ず。興のうちにして俄に感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、假のやどりに袂をうるほして、みづから笠の裏に書きつけ侍る。

世⁴にふるはさらに宗祇のやどり哉

研
究
篇

一、家

伊賀の國上野町の東北部、赤坂と呼ばれる坂路に續いて人家が立ち並んで居る。坂の上に立つて北を望むと、田野が遠く開けて、その間を服部川がゆるやかに流れ、藤堂氏が伊豫から移つた時植ゑたといふ松の大樹が、丁度正面に眺められる。そこから狭い街路を少し南へ引返すと、西側の古びた民家の前に、「芭蕉翁誕生之地」と記した小さな石標が立つて居るのを見出すであらう。そこが芭蕉の生れた家である。勿論建築物は往時のまゝのものではないが、場所は少しも變つて居ないのだといふ。數年前までは人が住んで居たが、今は全く廢屋となつて、稀に好事の人が門口を訪れるだけである。門札には「三重縣伊賀國阿拜郡上野赤坂町三拾九番屋敷」と書かれてあつた。

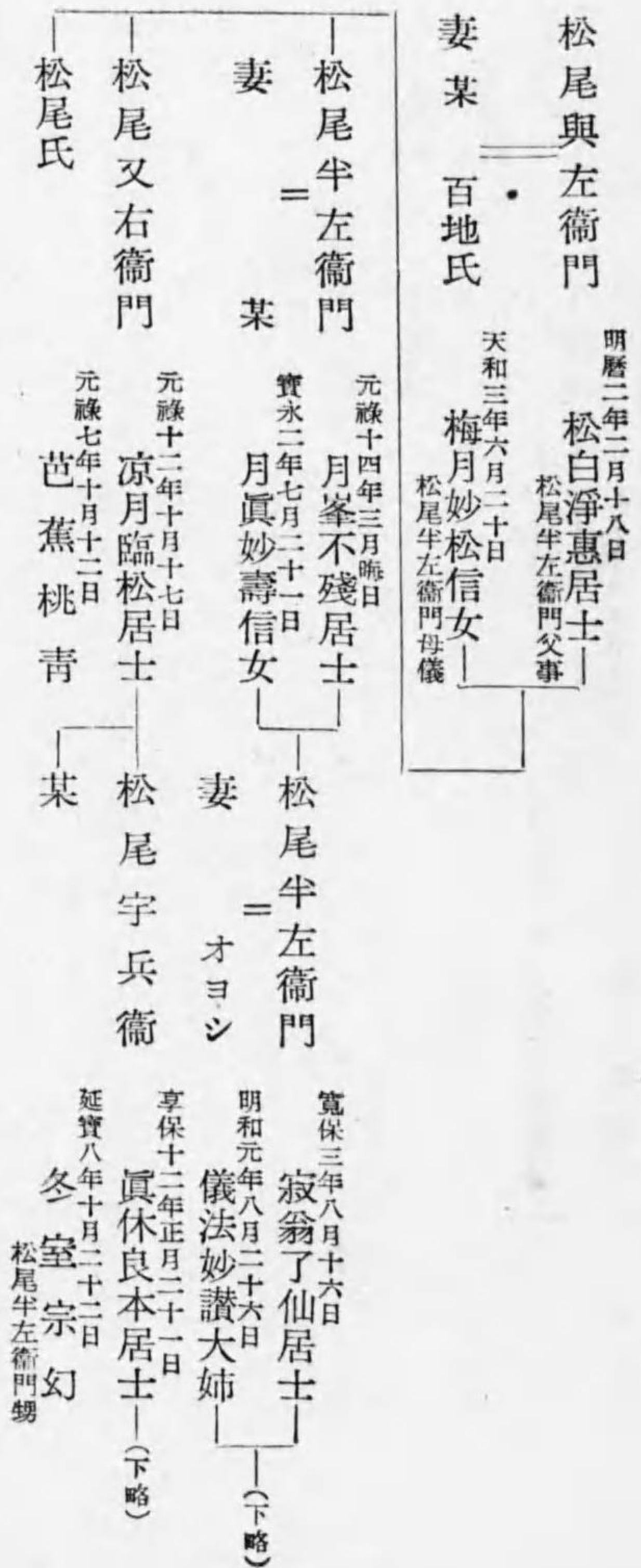
芭蕉がこの赤坂町の松尾家に呱呱の聲をあげたのは、寛永二十一年（正保元年）のある日であつた。松尾家は平宗清の末裔で、伊賀の國柘植の郷、日置・山川の一族だと傳へて居る。芭蕉の父は與左衛門といつた。母は伊豫宇和島の産だといふ。伊勢・伊賀を領した藤堂氏は、慶長十三

年伊豫今治から移封されたので、母の一家も恐らく藩主に従つて来たものと思はれる。竹二房の『芭蕉翁正傳』には「桃地氏の娘なり」とある。するとその桃地氏の女が、伊賀の人松尾氏與左衛門に嫁したわけである。竹人の『芭蕉翁全傳』によれば、二人の間には二男四女があつた。同書に掲げた松尾家系略圖には、



〔註〕 *百司は桃地と同じで、母方の姓を混同したものかと言はれてゐる。

とある。即ち芭蕉は與左衛門の第二子として生れたのである。然るに最近松尾家の菩提寺愛染院の過去帳を調査した所によれば、芭蕉にはなほ又右衛門といふ兄があつたといふ。(『鶴頭陣』昭和十三年一月號所載、
菊山當年男氏の「芭蕉と伊賀の俳壇」に據る。) 即ち過去帳による系譜を抜抄すれば左の如き關係になる。



又右衛門の名は元祿七年九月難波の旅舎から兄半左衛門に送つた芭蕉の手紙の中に、「道中に又右衛門かげにてさのみ苦勞も不仕、なぐさみがてらに参つき申候」と見え、又同じく兄宛の遺書中にも「如何様とも又右衛門便りに被成、御年被寄御心靜に御臨終可被成候」とあつて、確か

に半左衛門にとつても芭蕉にとつても、極めて近い間柄のものであつた事が知られる。たゞ芭蕉の手紙の文面では、何となく自分より下輩のものらしく聞えるので、その點に若干の疑念が挿まれないではないが、冬室宗幻の脇書にも「松尾半左衛門甥」とあつて、又右衛門が半左衛門の兄弟である事は否定し難い。すでに竹二房の『正傳』等には三男説も傳へられて居るのであるが、それは父の名と長男の名とを混同して居る等の爲に疑はれ、從來多く竹人の『全傳』説が信ぜられて來たのである。思ふに『全傳』の系圖に又右衛門の名が見えないのは、早く分家した爲に半左衛門の家系から除かれて居たのであらう。(菊山氏の「芭蕉と伊賀の俳壇」には「嗣子のなかつた半左衛門は末妹オヨシを養女とし、養女には養子を迎へて半左衛門を襲名させて居る。して見ると又右衛門は早く既に分家別居して居たもの」とある)とにかく右の過去帳の調査によつて、芭蕉の父・母・兄等の歿年が初めて知られ、又兄半左衛門の外に男子の兄弟があつた事も明かになつたわけである。

芭蕉の幼時については、その幼名を金作といつたと傳へる外何も知る所はない。父與左衛門は手習師匠をして居たとも言はれるから、家は勿論富んで居たとは思はれない。兄半左衛門は藤堂主殿長基の臣となつたといふが、これも芭蕉が晩年兄に宛てた手紙などに徴して、徴祿にすぎなかつたらう事が想像される。要するに芭蕉は伊賀の國上野の小身な武士階級の間で育つたのである。さうして芭蕉自身も亦早くから武士として仕官することになつた。竹人の『全傳』には「幼

弱の頃より藤堂主計良忠蟬吟子に仕へ、愛寵頗る他に異なり」とある。この藤堂良忠といふのは伊賀に住した藤堂家の一族中、藤堂新七郎家二代目の當主良精の三男である。良精は家祿五千石の侍大將で、上野の城代藤堂采女家に次ぐ家柄であつた。良忠の上になほ二人の男子を儲けたが、いづれも早世したので、三男良忠がその家を嗣ぐべき地位にあつた。芭蕉がこの良忠に出仕したのはいつからであるか、精確な年代は知る事が出来ない。たゞし當時幼主の近侍として召されたのは、遊び相手のお伽役に外ならなかつたと考へられるので、竹二房の『正傳』に「寛文壬寅(二年)の年始めて藤堂新七郎良精の臣となる。爰に指折れば此の時翁十九歳也」とある如きは疑はしい。竹人が「幼弱の頃より」と傳へて居るのは、些か漠然としては居るが、とにかく十歳前後の幼少の頃と解して差支ないやうである。芭蕉は良忠よりも二歳の年少であつた。勿論封建治下のやかましい主従關係は、この幼い遊び友達の間にも儼として存したわけであるが、芭蕉の忠實な奉仕と濃やかな友情とは、良忠の心にも深く感ぜられたのであらう。「愛寵頗る他に異なり」といふのは、竹人が單なる想像の言葉ではなくて、やはり藤堂家にさうした言傳へがあつたにちがひない。とにかく二人は主従であると共に、又一人の人間と人間との親しきで結ばれて居たのである。さうしてこの二人の特別な關係が、やがて芭蕉の生涯に大きな決定を與へるべき機縁とな

つたのであつた。即ち芭蕉の俳諧生活の第一歩は、實に良忠との關係から始まつたのであり、更に芭蕉が一生を風雅に繋がるべき運命の端緒も、思へばまたこゝに發して居たのである。

良忠の父良精は武人ながらも文學の嗜みがあり、漢詩や和歌の作も多かつた。その感化を受けたのであらうか、良忠もまた文藝好きな青年として生ひ立つた。そして當時の文藝好きな少青年たちの誰もがさうであつたやうに、彼がまづ向つて行つたのはやはり俳諧の道であつた。それほど新興の文藝たる俳諧は、若い人々の心に魅力的であつたのだ。良忠は北村季吟を師として學んだ。彼が俳號を蟬吟と言つたのも、季吟の一字を分けて貰つたものらしい。この間に芭蕉の金作は元服して、通稱を藤七郎、又忠右衛門、名を宗房と呼んで居た。今まで嬉戲の相手にすぎなかつた金作は、いつの間にか句作の最も好い伴侶になつて居たのである。もとより芭蕉自らその素質は持つて居たわけであるが、かうして彼をまづ俳諧に導き入れたのは、主君蟬吟の力であつた。而して當時の芭蕉の作については、明曆三年即ち十四歳の時、「犬と猿の世の中よかれ酉の年」といふ吟があつたといふが（梨一著『奥細道管抄』）、後世の所傳であるからそのまゝには信じ難い。確實な作として文獻の上に見える最初のものは、寛文四年松江重頼の撰になる『佐夜中山集』に入集した左の二句である。

姥櫻咲くや老後の思ひ出

〔註〕 姥櫻は彼岸櫻の一種、花期の間葉が出ないので齒無しに寄せた名である。句は姥といふ名に因んだ趣向で、年増女が老後の思ひ出に花を咲かせる意にきかせたのである。

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿

〔註〕 謡曲梅枝の一節「はやこなたへと夕露の葎の宿はうれたくとも、袖を片敷きて御とまりあれや旅人」などの文句をふまへたのであらう。もう月が出た。その月が宿へ導く案内者だ。どうぞこちらへ入らっしゃつてお泊り下さいといふ程の意。「旅」は「入らせたべ」とかけてある。

共に松尾宗房の名で出て居る。時に宗房は二十一歳であつた。

芭蕉のこの最初の作品は、縁語や掛詞を主にした一種の言語遊戯に過ぎない。だがこれが當時の所謂俳諧であつたのだ。俳諧はもと滑稽の文藝として起つた。即ち室町時代に連歌が隆盛を極めた頃、その餘興として行はれた俳諧の連歌が、やがて本連歌から獨立して一の新しい文藝と認められるやうになつたものが俳諧である。俳諧の連歌とは正式の連歌に對して、滑稽を主とした連歌の義で、當初は全くその場限りの言捨として玩ばれるにすぎなかつた。随つて本連歌の如く特に定まつた法式も無く、又用語にも題材にも何等の制限も設けられなかつた。この通俗性と自

由性とが、やがて江戸時代の新興文藝として民衆に迎へらるべき素因となつたのである。けれども江戸時代に於ける俳諧興隆の基礎を築いた貞徳は、俳諧を連歌から別つべき文藝的特性を、單に用語の通俗といふ形式的な點に於いて認めたにすぎない。即ち彼の解釋に従へば、俳諧とは俳言——俳言とは和歌や連歌の用語たる雅言に屬しない言葉で、俗語・漢語の類を意味して居る。——を用ひてよんだ連歌だといふので、ある作品が連歌であるか俳諧であるかといふ事は、一にその用語の如何によつて決せられたわけである。勿論當時の俳諧が滑稽の文藝たる事は、すでに自明の事として考へられて居たのであるが、滑稽の要素が直ちに俳諧として認められたのではない。それが俳諧である爲には、必ず俳言といふ表現媒介をからねばならない。だから俳諧の滑稽といふのも、結局この俳言を使用する上の技巧的手法に求められたのである。しかもこの文藝的には極めて幼稚な滑稽を形るべき用語の通俗性と自由性とに、當時の民衆たちは最も大きな魅力を感じて、俳言の技巧的な驅使にうき身をやつして居たのである。芭蕉もその一人であつた。かの『冬の日』・『猿蓑』等に見る高邁な俳諧精神も、その最初は實にこのやうな所から發足したのである。

寛文五年十一月、蟬吟は自ら主催して貞徳十三回忌の追善俳諧を興行した。

野は雪に枯るれど枯れぬ紫苑哉

蟬吟

鷹の餌乞ひと音をばなき跡

季吟

に始まる百韻一卷で、一座の連衆は蟬吟以下窪田正好・保川一笑・松木一以・松尾宗房の五人であつた。——季吟は蟬吟の師匠として、特に脇の一句を附けただけである。——その中宗房の附句は十八句を數へ、これが芭蕉の連句の作として傳はる最初のものである。もとよりそれは貞門時代の一般の作と異なる所はないが、とにかくかうして芭蕉は主君蟬吟を中心とした文藝好きの人の間にあつて、次第にその俳諧熱を高めて行つたにちがひない。翌寛文七年に出た『續山井』(季吟の命によつてその子湖春の撰んだ集)には、宗房の發句二十八・附句三の入集を見るに及んで居る。同書の刊行されたのは寛文七年十月であるが、その撰が成つたのは同年五月の事であるから、集中の夏・秋・冬季の句は寛文六年以前の作でなければならぬ。こゝに收められた宗房の句も、恐らく大部分は寛文六年若しくは五年頃の作であつたらう。——本文篇『續山井』所出の句参照。——即ち芭蕉の俳諧に對する熱心さは、寛文四年頃から引續いて益々盛んになつた事が知られるのである。しかし芭蕉の生活がこのまゝ安らかに過ぎたのであつたら、蟬吟との間は俳諧を通して更に親しく結ばれ、藤堂家の臣下として相當の地位に登れたかも知れないが、結局平凡な武士の一生を終る外

はなかつたであらう。芭蕉がいかに俳諧を愛し、又蟬吟やその周囲の人々もいつまでも句作の熱を失はなかつたとしても、彼等の地位と生活とは、それを一の娛樂乃至趣味以上にまで深く進める事を許さなかつたにちがひない。然るに天はこの人に近世文藝史上の大業を成さしめる意があつたのであらう。この時芭蕉の身にとつては最も悲しむべき不幸が起つた。人を偉大ならしめようとする時、神は決して世間的な幸福や順境をその人に與へないのである。

二二七 命

寛文六年四月二十五日、蟬吟は僅かに二十五歳を一期として歿した。彼は前に述べた如く、藤堂新七郎家の當主良精の嗣子であつたから、一家一門の悲しみは言ふまでもなかつた。わけでも幼少の頃から長い間馴れ親しんだ芭蕉の歎きが、いかに深かつたかは想像にあまりがある。同年六月十四日、七七日の忌明を待つて、父良精から高野山報恩院へ蟬吟の位牌と日牌とを寄附した。その時の使として芭蕉は高野山に登り、まもなく役目を果して歸國した。それから芭蕉にとつては、どんなに味氣無い日が續いた事であつたらう。武家の習として一日も嗣子を缺く事は出来ないので、良忠（蟬吟）の死後はその弟良重が嗣子となり、良忠の未亡人小鍋を更めて良重の室とした。當時良重は十八歳、小鍋は二十歳であつた。芭蕉がそのまま藤堂家にとゞまるとすれば、當然この良重に仕へねばならぬのである。だが固より芭蕉には二君に仕へる志はなかつた。竹二房の『芭蕉翁正傳』や、鳥醉が伊賀の古老に書いて書きとめた「伊賀實録」（多編一）等によれば、——「伊賀實録」には多少事實の齟齬があるが、——芭蕉はしきりに致仕を乞うたけれども許さ

れなかつたので、遂にひそかに主家を逃れ去つたと傳へて居る。たゞし竹二房や鳥醉の記録も、勿論根本史料としての正確さを持つものでなく、又この間の事情については、なほ種々の異説も存するのである。

芭蕉がどうして主家を亡命するに至つたか。その事情を詳しく考へる事は今日残されて居る資料からだけでは、到底不可能といふ外はない。實は亡命といふ事すらも、後世の文獻に傳へられるにすぎないので、疑へば疑ふ餘地は存するのである。けれども藤堂家では、古くから芭蕉を脱走者として取扱つたらしく、又後に祖父良精の嗣となつた良忠の子良長が、芭蕉の筆蹟をある人に乞はれて送つた返事の手紙に、

舊臣甚七郎(註、芭蕉の通稱)の認物爲吟味候處、漸屋敷中に壹枚有之候へども出來宜からず、折角の御頼に候間御送申上候。御落掌被下度候。尙殿中御無用可被下候。

といふ文句が見え、この「殿中御無用」の言葉は表向に憚る意を含むものと考へられる。芭蕉の一身上公的に不都合とさるべき何等かの事情が伏在してゐた事は、どうしても認めねばならない。而して一方後世の文獻にせよ、亡命の事實を傳へるものが二三にとゞまらない事を思へば、芭蕉の生前彼自身もしくは門人の口から、さうした事實について全く語られて居ないといふ事も、却つてこれを憚つた結果だと解釋さるべきである。だがその亡命は高野山から歸つた直後であつたか、又それは前に述べた如く、單に致仕を乞うて許されなかつた爲だけの事情からであつたらうか。

伊賀に傳へる口碑によれば、芭蕉の亡命の理由として戀愛事件をあげて居るものが多い。もとよりこれらの傳説には、所詮傳説以上の價値を認める事は出來ないであらう。けれどもそれが芭蕉の郷里にかなり喧傳されて居るとすれば、必ずしも好事の附會とのみも解し難い。少くとも芭蕉の亡命の前後に、何か異性關係についての問題が存して居たのではあるまいか。そこで直に思ひ浮べられるのは、芭蕉の晩年に至つて彼の身邊に現はれた一女性壽貞尼の事である。壽貞がどんな素性の女で、芭蕉とどんな關係にあつたか、それはなほ謎のまゝであるが、最近上野町念佛寺に藏する過去帳によつて、壽貞が中尾源左衛門(俳號槐市)家の供養を受くべき縁類であつた事が明かにされた。即ち念佛寺の日過去帳二日の部に「松譽壽貞中尾源左衛門殿」とあつて、これが芭蕉と關係を有する壽貞尼と認められるのである。(菊山當年男氏の調査による)たゞしこの過去帳には歿年月の記載がないので、これを確定的に認めるにはなほ一段の考證を要するのであるが、壽貞尼の歿日が二日と推定される點、この過去帳に載せられた前後の人々がすべて元祿年間までに歿したものと

である點、松譽壽貞だけに歿年月の記載がないのは念佛寺で葬送されなかつた、——即ち他の地で歿した爲である點等から考へて、ほど壽貞尼に該當する事が認められる。すると彼女はやはり芭蕉と同じ郷里に生ひ育つたわけで、隨つて芭蕉が郷里を出るより以前、すでに彼女を識るべき機會があつたらう事は、當然に考へられる。芭蕉が元祿六年四月廿九日附で、美濃大垣の門人宮崎荊口に送つた手紙がある。その中に

拙者當春猶子桃印と申すもの三十餘迄苦勞に致候而病死致、此病中神魂をなやませ、死後斷腸之思難止候而精情草臥、花の盛春の行衛も夢のやうにて暮らし、句も不三申出候。

と報じて居る。文字通りに解すれば、桃印は芭蕉の甥に當るわけである。甥とすれば兄弟の中の誰の子であるか。兄半左衛門は末妹を養つてこれに嗣を迎へたのだから、勿論實子はなかつた筈である。又右衛門の子にもその歿年から見て桃印に當るものは居ない。(前掲過去帳による 松尾家系圖参照)世捨人的の生活を送つた芭蕉が、他に嫁した姉や妹たちの子供を扶養したらうとも思はれない。桃印の事はなほ元祿三年九月廿日附で、折から近江膳所に客寓中の芭蕉に宛てて、江戸在住の曾良から送つた手紙の中にも、「桃印・勘兵衛無事、次郎事等委伊兵衛申上候由略之申候」とある。——勘兵衛は不明であるが、次郎とはかの壽貞の子次郎兵衛の事であらう。とにかくいづれも芭蕉に親

しい人との消息を報じたのである。——すると少くとも奥の細道の旅に出る前後から、桃印は芭蕉の身邊に近く暮して居たのであつた。「三十餘迄苦勞に致候而」とあれば、更に芭蕉は桃印の一生を通じて、爲に心を傷める事が多かつたものと思はれる。恐らく病弱であつたのであらう。しかも遂に三十餘歳の若さで果敢なくなつてしまつた。芭蕉の悲みがいかに深かつたかは、かの手紙の文言の哀切を極めて居るのにも知られるのであるが、事實元祿六年の夏から秋までの間は、芭蕉の句作が極めて少いのである。又これより先元祿六年三月十二日附で、出羽鶴岡の岸本公羽に送つた芭蕉の手紙に、「手前病人一兩夜少心持かるき體に見え申候へ共、大病の義故たのもし氣薄く守り暮し候。誠隠閑律の中まで世の有様のがれ難く、是非なき事に胸をいたましめ罷在」と言つて居るのも、その年月から見て必ず桃印の病についての事にちがひない。それ程に芭蕉の心を傷め悲しませた桃印は、果して文字通りの猶子であつたのだらうか。桃印が歿したのを假に三十一歳とすれば、芭蕉と年齢の差は十九年しかない。しかし元祿の當時男子が十八九歳で妻帯するのは、さして珍しい事ではない。芭蕉に二十歳の折に儲けた子があつた——そして桃印が即ちそれだつたのではあるまいかと疑つても、だから決して不當だとは言へない。さうしてこゝに芭蕉と壽貞との關係が、更に深い疑問で考へられるのである。けれども芭蕉が十八九歳の青年宗房

であつた日、壽貞との戀が結ばれて居たとしても、その事が直に彼の亡命と關はる所があつたと見る事は出来ない。芭蕉の亡命の理由として傳へられる戀愛事件は、實はなほ他にあるのであるが、それはこゝに詳しく述べるまでもなく、すでに根據の極めて薄弱な事が指摘されて居る。たださうした傳説が存する裏面に、壽貞との問題が考へらるべき可能性は確かに認められるのであるまいか。

芭蕉亡命の真相は果して何であつたか。それはやはり彼が二君に仕へるのを屑しとしなかつた心情に歸せねばならないやうである。路通の『芭蕉翁行狀記』に、

芭蕉老人本土は伊賀の國上野にあり。左右なきものゝふの家の子にて侍りしが、若かりし程頼む方に別れ、同じ道にと思ひ定めけれども、天が下の掟きはまりてはからひがたく、親はらからの憂目ひとかたならねば、かひなき命の露をかけて、武藏野國の廣きあたりにはまぎれ行き、云々。

〔註〕(一) 殉死の意。(二) 寛文三年殉死の禁が出た事。

とあるのは、路通が芭蕉の比較的遅い門人であり、師の生立についてさまで深く知つて居なかつたらしい事から、なほそのまゝ信じ難い點もあるであらう。だがこれはとにかく芭蕉直門の人の

語る所である。芭蕉の性格から考へても、又最も感じ易い年頃であつたのから見ても、主君の死が彼の心に烈しいショックを與へた事は言ふまでもなかつたにちがひない。寵を得た近侍の臣が主人の死を追ふ事は、江戸初頭までなほ行はれて居た一の武士道であつた。寛文の當時天下の制禁が出て居なかつたとしたら、事實芭蕉も追腹を切つたかも知れないのである。けれども彼の亡命が單にその悲しみだけに基いて居たのみならば、殉死のかはりに出家遁世でもすべきであつたらう。然るに亡命後の芭蕉の動靜は、さうした事實があつた事を少しも思はせないのみならず、むしろ一時は世間的な榮達をすら望んだのであつた。『行狀記』の所傳は、なほ他の解釋を加へないかぎり、そのまゝには首肯し難いのである。そこで前に述べた竹二房や鳥醉の説が、最も有力視されねばならなくなる。即ち蟬吟の死を悲しんだのは言ふまでもない事ながら、芭蕉にとつて更に堪へ難い事は、たとひ舊主の弟であるにせよ、蟬吟の歿後日を更へずして直に良重に出仕するといふ事であつた。新しく嗣子になつた良重には、勿論従前からの近侍の臣も居たであらう。それらの人々から頭を壓へられ勝であるべき事も豫想されたにちがひない。蟬吟時代に寵を得て居ただけに、芭蕉——特になほ客氣の失せない芭蕉には、それが面白く思はれないのは當然であつた。のみならず蟬吟の未亡人がそのまゝ良重の室となる事も、一家の安定を計る上から止むを

得なかつたにせよ、蟬吟の恩顧を思ふものにとつて快い筈がなかつた。芭蕉はもし許されるならば、武士の名譽として殉死を選んだかもしれない。だがかうした事情の下に再び出仕する事は、どうしても心に満足する事が出来なかつたのである。しかも致仕の願は聽されない。遂に無斷で主家を出奔するに至つたといふのは、恐らく最も真相を得たものであらう。さうして見ると芭蕉が亡命後、出家遁世に至らなかつた事にも別に矛盾はない。又芭蕉は脱走者でありながらもその後屢々郷里に來往し、加之藤堂家にさへ出入して居るのであるが、これも亡命の理由が芭蕉の不徳義にあつたのでなく、むしろ私情としては恕せらるべきものであつたからであらう。特に良重は寛文十二年十二月に歿し、蟬吟の遺子良忠が入つて嗣となつたのであるから、藤堂家にあつても芭蕉に對する憎しみは全くなかつたわけである。たゞ一旦脱走者としての取扱を受けた以上、表向には憚らねばならなかつたが、内實には主家からの構ひはなかつたらしい。

芭蕉は亡命するに臨んで、隣家の同僚城孫太夫といふ者の門前に、

雲と隔つ友かや雁の生きわかれ

と書いた短冊を残して去つたといふ。これについても異説が區々で、或は手紙を投込んであつたといひ、或は戸口に短冊を貼つたともいひ、或は門の戸に直接書いてあつたとも傳へて居る。城

孫太夫はやはり藤堂良精の家臣で、鷹飼の役を勤めて居たらしく、寶永七年十一月二日に歿した人である。芭蕉はこの人と親しい友人關係であつたのだらう。たゞし當時の城内の事情から見て、芭蕉がその隣家に住んで居たとは思はれず、又通説にはそれが寛文六年、蟬吟の歿した年の秋の事だと言はれて居るが、句は雁の別れで春季の作と見なければならぬ。随つてこの通説は、到底そのまゝに信ずるわけには行かない。然るに竹人の『芭蕉翁全傳』には

かくて蟬吟子の早世の後、寛文十二子の春^九仕官を辭して甚七とあらため、東武に赴く時、友たちの許へ留別、

雲と隔つ友にや雁の生別れ

とあつて、句を残した事情も時期も、全く所傳を異にして居るのである。即ちこれだと普通の留別の句にすぎないので、句意並に季語から考へても、この方が遙かに穩當に解せられる。たゞ『芭蕉翁全傳』には蟬吟歿後寛文十二年に至るまで、芭蕉の動靜について全く記す所がなく、その間芭蕉の亡命を憚る爲の作爲があるのではなからうかといふ疑が存する。それは『全傳』の著者竹人が、上野の城代たる藤堂家の家臣で、また芭蕉の門人土芳に従つた荻子の弟であらから、藤堂家の爲にも芭蕉の爲にもあまりかんばしくない亡命一件には、全然觸れる事を避けたらしく考へ

られるからである。だが同時にこの立場から見て、もし雁の別れの句が亡命の際の作であるならば、『全傳』に特にこれをあげる事はしなかつたであらうし、この句に關する所傳の限りでは、『全傳』の説が最も信すべきものと思はれる。而して一方亡命の事實は、やはり『全傳』に空白のまま残された寛文六年から同十二年春までの間に存した事が、暗黙の裡に示されて居るのではなからうか。しかも次に述べる如く、この間に芭蕉は上京遊學して居た事が推定されるので、彼の亡命は高野山から歸國の後、恐らく間もない頃の事であつたらう。

三、上京と『貝おほひ』

主家を去り郷里を出て後、寛文十二年の春に至るまで、芭蕉は何處にどういふ生活を送つて居たか。これまた確實に傳へる所は何も無いのである。蝶夢の『芭蕉翁繪詞傳』の如きには、「これより延寶の年までは、跡を雲霞にくらます龍の如く、山にや蟄せし海にや隠れし」と、その消息の茫漠たる事を述べて居る。すでに事が亡命であつたのだから、表向には勿論家郷との連絡も絶えて居たのであらう。けれどもその間全く行方不明であつたのではない。現に寛文六年から以後數年間の俳書を檢する事によつても、彼の足跡は臙氣ながらも辿られる。寛文七年十月に刊行された『續山井』に、宗房の句が多數入集して居る事は前にも述べたが、その大部分は寛文六年以前の作だとしても、その中には同七年の作に成るものも若干あると見られる。のみならず寛文九年に成つた安靜の『如意寶珠』(撰の成つた年安靜が歿した爲、刊行は延寶二年安靜の門人似船の手でなされた。)、寛文十年刊の正辰の『大和順禮』等にも宗房の句が見え、又寛文十二年梅盛の撰になる『山水』に入集した宗房の句も、その風調から見て入集より數年前の作と思はれる。即ち少くともこの間、彼が相變らず俳諧に親しんで

居た事だけは明かに知られるのである。然るに以上の諸集には、すべて宗房の住所を伊賀もしくは上野と記してあるので、もしそれが芭蕉の現住所によつたものだとすれば、彼はたゞ主家を去つたといふだけで、郷國から外へ出たものではなかつたもの如く思はれる。しかし主従関係の嚴重であつた當時、苟くも無斷で主家を去つたまゝ、その地に止まつて居るといふ事は有り得べくもない。右の諸集に記された住所は、單に本貫に従つたものと見るべきであらう。では芭蕉が亡命後の行く先は何處であつたか。

竹二房の『芭蕉翁正傳』には、芭蕉の亡命後の消息について、それより洛に登り、季吟に遊學す。

と明記してある。勿論これは後世の記録にすぎないが、支考が『俳諧十論』に

壯年に仕官をしりぞぎ、洛の季吟に俳諧を學びて、＊埋木は書本にて朱點を加へたる物二冊あり。其の傳は寛文の中頃ならん。

〔註〕 ＊埋木は季吟が俳諧の作法について説いた書。延寶元年刊行されて居るが、芭蕉は刊行以前これを書寫した上、朱點を加へてあつたのであらう。

と言つて居るのは、それが芭蕉に親炙したものの言葉である以上、輕々に見る事は出来ない。芭蕉が季吟を師とした事は、芭蕉自ら「吟先生」〔田舎之句舎〕と稱して居るので明かであり、なほ他にも多くの證憑が存して疑ない事である。この師弟關係はもとより蟬吟が季吟に師事したことから、自然に結ばれたものと見るべく、蟬吟在世中すでに芭蕉は季吟に直接教を受ける機會がなかつたともいへない。かの貞徳十三回忌の追善俳諧の如きも、鳥羽の實相寺に納められたので、その時季吟の許まで一卷を持參した者が、芭蕉ではなかつたらうかといふ想像も許される。随つて季吟を師としたといふのも、必ずしも亡命後の事と限らるべきではないが、支考の言ふ所と竹二房の傳へる所とを併せ考ふれば、亡命後の芭蕉の行動はほほ察せられるであらう。即ち主家を去つて後、彼は京都に上つて暫く修業しようとしたので、こゝに季吟との關係が一層親密になるべき機會を得たのである。

季吟に師事した事から見れば、芭蕉の上京は専ら俳諧修業を志したもののやうであるが、芭蕉はなほこの頃伊藤坦庵について漢學を學んだと傳へられ、又北向雲竹に書を學んだのもやはり亡命後在京中の事らしい。それらの事實については、今詳しく知るべき資料がないが、とにかく芭蕉は寛文六年後數年の間京都にあつて、俳諧・漢學・書道等の修業を積んで居たものと思はれる。而してそれらの修業が、すべて俳諧師として立つべき目的の爲のものであつたかといふに、それ

はなほ疑はしいと言はねばならぬ。當時芭蕉はなほ二十餘歳の青年である。亡命の動機は單に主君を失つた悲しみのみによるのではなく、むしろ新しい主君の下に鬱屈するのを屑しとしなかつた故と見るべきであつたのだから、上京を決した意中には青年らしい功名心がなかつたとどうして言へよう。もとより彼に詩人の素質があつた事は争へない。けれども當時の武士的教養を受けた彼が、まだ二十三四歳の若さで、一生を俳諧師として終らうなどと考へる事は到底想像し難い。況んや後年「幻住庵記」に自ら「一たびは仕官懸命の地を羨み」と言つて居るのである。この述べは勿論必ずしも上京當時の事を顧みたものとは限られない。實を言へば彼の上京は特に志した目的があつたのではなく、單に仕官の素地として一般的な學問修業をするといふ位のものであつたらう。さうして愈々彼が懸命の地をも得ようと志したのは、江戸への出府を決心した時であつたと思はれるが、いづれにせよ彼の上京は、將來武士階級の間にあつて身を立つべき計をなすものであつたにちがひない。しかも此の一筋に結ばれた宿縁は、彼にとつて更に絶ち難いきづなであつた。上京修業の間にも、彼が最も多く心を惹かれて居たのは俳諧であつたのだ。

亡命後に於ける芭蕉の俳諧についてはすでに述べた。「續山井」を始め『如意寶珠』・『大和順禮』・『山下水』等に見える彼の作は、勿論貞門の風調に終始して居るのであるが、寛文末年頃に

至つて俳壇には漸く新しい展開の機運が動き始めた。即ち俳諧の通俗性と自由性とに對して、更に徹底的な解放を要求しようとする談林新風の運動である。それが俳壇の一般的な動向となつて現はれたのは、延寶年代に入つてからの事であるが、宗因門下の新鋭の徒は、夙く活潑な革新の態度を示して居たのである。貞門中特に穩健な季吟に師事しながらも、若い芭蕉の心はこの時代の新傾向に無關心で居れる筈がなかつた。詩人的な感受性が豊かであればある程、長く古風の殻の中に閉ぢ籠つて居る事は出来ないのである。芭蕉は京都でどういふ俳友と交つて居たか明かでないが、その間ひそかに新風に心を寄せて、自ら大いに尖端を行くだけの熱意を持つて居たらしい。しかもこの熱意は夙くも一のすぐれた成果を世に示した。それは彼が京都から郷里に歸つた後撰んだ『貝おほひ』一卷である。

『貝おほひ』は寛文十二年正月二十五日、伊賀上野の鎮守菅原社に奉納した三十番の發句合で、實に芭蕉の處女撰集とすべきものである。その板行されたのは江戸東下後の事らしいが、發句合の成つたのは勿論正月廿五日より以前の事ではなければならぬ。恐らく東下に際して、かつは人への置土産とし、かつはこゝに日頃の新調を示さうとしたのであらう。その内容は序文に、自ら(一)小六ついたる竹の杖、(二)ふし／＼多き小歌にすがり、あるは流行言葉はやりことばの一癖ひとくせあるを種として、言

拾てられし句どもを集め、右と左に分ちて連節(三)つれがしにうたはしめ、その傍らに自らが短き筆(四)しんぎの辛氣晴しに、清濁高下を記して三十番の發句合を思ひ太刀折紙(五)の式作法もあるべけれど、我儘氣儘に書きちらしたれば、世に披露せんとはあらず。名を貝おほひといふめるは、合せて勝負を見る物なればなり。又神樂の發句を卷軸(六)に置きぬるは、歌に和(七)やはらぐ神ごゝろといへば、小歌にも予が志す所の誠を照らし見給ふらん事を仰ぎて、當所天滿大神(八)あまみつおほんかみの御社(九)みやしろの手向草(十)たむけぐさとなしぬ。

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房、釣月軒にしてみづから序す。

〔註〕(一) 小六は慶長の頃江戸赤坂に住んで居た關東小六。美男で唄が上手であつたといふ。「小六ついたる竹の杖、小六もとは尺八中は笛、小六末は女郎衆のそれ誠に、ほんにさて筆の軸」(糸竹初心集)等、その他小六を題材とした小唄が當時流行して、小六節と稱された。(二) 竹の縁で續けた。(三) 左右に並べ分つ意。(四) 筆の心(シン)とかく。(五) 思ひ立ちとかく。(六) 一卷の最後。三十番目の句は左右とも神樂の句である。

と言つて居る通り、當時の小唄や流行言葉を用ひて仕立てた發句を左右に分ち、芭蕉がその優劣を判したものである。しかもその判詞もまた小唄・流行語を巧みに取入れて趣向を凝らしてあるが、今芭蕉自身の句を合せた九番と二十番とをあげて、その面目を窺つて見よう。

九番

左勝

露節

鎌でできる音やちよい／＼花の枝

右

宗房

きても見よ甚兵衛が羽織花ごろも

左、花の枝をちよい／＼とほめたる作意は、誠に俳諧の親(三)ともいはまほしきに、右の甚兵衛が羽織は、きて見て我折(四)がせりやといふ心なれど、一句の仕立(五)がもわろく、染め出す言葉の色もよろしからず見ゆるは、愚意の手づ／＼とも申すべく。そのうへ左の鎌のはがねも堅さうなれば、甚兵衛があたまもあぶなくて、負に定め侍りき。

〔註〕(一) ちよい／＼は物を嘆賞する時いふ言葉で、江戸初期頃歌舞伎の野郎(少年俳優)の舞臺姿などをほめるのに多く言つて居る。句ではそれを鎌で切る音にかけたのである。(二) これも野郎などをほめる時「親はないか、親は／＼」(この座にその人の親は居合はさぬか。親の心では子供の上手な藝をほめられてどんなに嬉しからうといふ程の意)といふのをとつて、俳諧の親(すぐれて居る意)と言つたのである。(三) 甚兵衛羽織は丈の短い尻の裂けた羽織であるが、それが小唄の文句にあつたのであらう。(四) 着て見てと来て見てとかく。(五) 我を折るとは我意を張るのを曲げて従ふこと。「我折りや」は「我を折れよ」である。「きて見て我折りや」も小唄の文句を用ひ、この句に對

して閉口せよとの意をきかせたのである。(六) 仕立て、染め出す、共に羽織の縁語。(七) 手づ、は拙劣、不器用の意。

二十番

左勝

政輝

鹿をしもうたばや小野が手鐵砲

右

宗房

女夫鹿や毛に毛が揃うて毛むつかし

左の發句、小野といふより鹿とつゞけられ侍るは、かの紫のしなもの光るお源の物語にも、小野に鹿のけしきを書きつらね侍りしより、尤もよく取合はされたるなるべし。そのうへおのが手鐵砲といふをとりなされたる鐵砲のすの口がしこく打出されたる玉の句ともいふべければ、火繩の非言をうつべきやうもなし。右の女夫鹿はしく論をせんも毛むつかしければ、あぶなき筒先足ばやに逃げのき侍りぬ。

〔註〕(一) 小野は洛北大原附近の地名。(二) しなものはあだめいた美女をいふ。紫式部のことを當時の俗語でしやれて言つたのである。(三) これも光源氏をしやれて言つた言方。(四) 源氏物語、

夕霧の巻に落葉宮の住まれる小野の山莊のさまを「鹿はたゞ籬のもとにたゞみつゝ、山田の引板にもおどろかず」と敘してある。(五) 「己が手鐵砲」といふ流行語か小唄の文句があつたものと思はれるが不明。手鐵砲は自分の手持の鐵砲の意。(六) 巢口(すくち)は鐵砲の筒先の孔の邊をいふ。それを口がしこくに續けたのである。(七) 立派な句の意。打出す、玉、すべて鐵砲の縁語。(八) 火繩の火とかく。非言をうつは批難する意。(九) けむつかしは煩はしい、うるさい意。句は鹿の女夫が揃つてゐるのを、あまり仲よくつつきすぎて居てけむつかしいと言つたので、些か岡焼の意を舍めたのである。けむつかしが當時の俗語で、それを毛にかけたのが一句のしやれ。

右の二番の例だけによつても、『貝おほひ』の句が従來の作に比して著しく異つた風調のものである事は明かに認められよう。のみならず判詞の輕妙自在さには、芭蕉の才氣のなみくならぬ事が窺はれると共に、中年以後の芭蕉だけを知る者にとつては、そのあまりに遊戯的氣分に満たされて居る事に、むしろ意外の感さへも持つにちがひない。更に『貝おほひ』の全體を通じて見ると、あるいは「これさこゝもとへ、小六方とほざけだいたるでつちはうるしいこんではあるではあるぞ」(十二番判詞)と、所謂六方詞をしきりに振舞したり、あるいは又「とても濡りよならなまなか時雨はいやよ、君が涙の雨にしつぽとぬれかけ」(二十三番判詞)とか、「伊勢のお玉は笠か鞍かといへる小歌なれば、誰も乗りたがるはことわりなるべし」(十七番判詞)などと、恰も遊蕩兒ら

しいふざけを弄したやうな類は、いくらでも見出されるのである。寛文・延寶度に於ける世相の中に、刺戟の多い都會に遊學して居た一青年を想つて見るがよい。祇園の花鳥原の月が、彼と全く没交渉の存在であり得たと、どうして考へられよう。もとより右のやうな判詞は、所謂文章のあやとして見るべきものではあるが、中には「われも昔は衆道すきの」(二番判詞)と、彼自身の上を告白したやうな言葉も見られるのである。だが我々は芭蕉の人に對して、こゝに淡い幻滅を感じるよりは、時代に呼吸する一人の若人として、現實の人間の姿を正視せねばならない。さうして芭蕉の藝術を眞に理解する爲に、彼が決して現實に眼を背けて歩いた人でない事を知らねばならないのである。その點で芭蕉の藝術と西鶴の藝術とは、本來少しも異質のものではなかつた。

『貝おほひ』一卷に我々は青年芭蕉の姿を明かに見る事が出來た。けれどもそれはたゞそれだけの資料に止まるべきものではない。芭蕉初期の作品として、更に重要な意味を持つのである。この書は元來郷土の鎮守神に奉納すべき特別の目的を以て撰ばれた。序文の中にも「予が志す所の誠を照らし見給ふらん事を仰ぎて」と言つて、俳諧の道に對する誠實な態度を表明して居るのである。いかにそれがふざけた言葉に満ちて居ようとも、一時の興に任せた戯ぶれではなかつた筈である。當時俳諧がなほ滑稽文藝の意に解され、しかもその滑稽は専ら用語・素材の通俗性に

係つて居た場合、その清新な展開を求めようとすれば、何よりもまづ用語・素材そのものの新奇を選ばねばならなかつた。貞門から談林への展開は、實にこの意味に於ける俳諧の通俗性と自由性との擴充に外ならない。『貝おほひ』が當時の小唄・流行語を盛んに驅使して居るのは、即ちこのやうな展開に向つて最も新鮮な動きを示したものであつた。さうしてこゝに我々は、芭蕉のすぐれた才能を十分認めねばならないであらう。勿論それは『貝おほひ』の絶對的な文藝價値について言ふのではない。けれども俳諧の史的展開から見ると、まだ談林の新風が纔かに自覺的な運動に入つたばかりの際に、夙くもこれだけの自由な境地を開拓して居る事は、確かに注意に値ひする事であつた。『貝おほひ』は單に芭蕉の處女撰集として記憶さるべきものでなく、歴史的にその特異な地位が認められねばならないのである。のみならずその判詞の輕妙を極めた機才に至つては、西鶴の俊敏に比しても多く優劣を定め難い。かうした機才は後の『田舎之句合』や『常盤屋之句合』にも見られるのであるが、芭蕉は實にこのやうな才氣に満ちた青年であつたのだ。しかも彼がこの才鋒を深く韜んで、「松のことは松にならへ、竹のことは竹にならへ」とまで、身を隨順の境に置くべき工夫に勤めた事を思へば、さび・しをりの藝術を裏づける彼の人間性に對して、更に深い尊さを覺えずには居れないだらう。

四、東 下

『貝おほひ』を上野の鎮守に奉納して間もなく、芭蕉は故郷を去つて遠く江戸に下つた。竹人の所傳によれば、かの「雲と隔つ」の吟は、「東武に赴く時、友だちの許へ留別」であつたといひ、随つて彼が江戸へ出發したのは、歸雁の頃即ち二月頃のことと思はれる。この東下が何の目的であつたかは、今定かに知るよしもない。『貝おほひ』の稿本が行李の中に携へられ、それが江戸に着いた後開板された事や、又後に述べる如く、延寶年間に入つては直に俳諧方面に於ける活動の跡が辿られる事などを思へば、俳諧を以て身を立てようとしたのだと考へられない事もない。しかしすでに季吟門にあつて、ある程度の素地を作つて居た彼としては、今遽かの江戸出府を果して得策としたであらうか。又まさに興るべき新風の機運を夙く察したとすれば、寧ろ活動の地を難波に選んだ方がよかつたかも知れない。いづれにせよ當時俳壇の實狀に即して考ふれば、東下の目的が俳壇への進出にあつたとするのは、妥當な推測とはし難い。まだ二十九歳の青年宗房が、新興の都會江戸に志したといへば、やはりそこに思ひ浮べられるのは、身を立てようとする

世間一般の若い欲望である。「一たびは仕官懸命の地をうらやみ」と言つた後年の述懐が、いつの頃に於ける心事を多く顧みたものであるかは、おのづからこゝに想像されるであらう。

芭蕉の江戸生活がまづ何處で始まつたか。それについては有力な二の説がある。一は杉風四世採茶庵梅人が「杉風秘記拔書」として引用した「松尾甚四郎殿伊賀よりはじめ此方へ被落着候。剃髮して素宣と改められ候時、衣更着は十徳をこそ申すなれ 杉風 斯く申しおくりぬ。」とある記事で、一は菊岡沾涼の『綾錦』（享保十七年刊）に「芭蕉翁京都において始めて履をとかれしは、古卜尺のやどり也」とある所傳である。この二説のいづれが信ぜらるべきであるか。それについて考證的な立場からはなほ解決が下されて居ない。「杉風秘記」なるものの確實性が十分立證されない今日では、むしろ『綾錦』の説に従ふのが穩當とされて居る。けれども文字通りに初めて履をといたのが卜尺の許であつたとしても、その後の芭蕉と杉風との深い交渉から考へるならば、江戸に於ける芭蕉の生活が、まづ杉風の庇護の下に始まつたとする事は、必ずしも不當な解釋ではない。たゞし杉風の許に身を寄せるに至つた事情、時日等については全く分らない。又最も早くから扶助を與へたものが杉風であつたとしても、芭蕉の生活が彼の扶助のみで續けられて居たとも考へられない。なほ「杉風秘記拔書」によれば、芭蕉は杉風の許に落ちつくと共に、薙

髪して素宣と稱したもののやうであるが、芭蕉の江戸出府が青年の世間的功名心からであつたとすれば、少くとも東下後間もない頃にそのやうな事實を想定する事は困難である。——「十八番發句合」によれば「延寶六初冬日 坐興庵桃青」とした署名の下に、「素宣」の印が用ひてあるので、延寶六年十月以前に素宣と稱した事だけは明かである。——要するに芭蕉が江戸に出てから後二三年間の動靜は、これを確實な文獻に徴して考へる事は今日望まれない。我々はたゞこの間に、はやくも芭蕉の胸中には「ある時は佛籬祖室のとぼそに入らむ」との念が往來し始めたのであるまいかといふ想像をもつのみである。

江戸の俳壇で芭蕉の姿を最初に見出すのは、延寶三年五月のことである。それは折から東下中の宗因を迎へて催された或る俳諧の席で、そこに芭蕉は「桃青」と名告つて出座して居るのである。宗因と芭蕉との關係については、從來も二三の説が傳へられて居る。中でもよく知られて居るのは、市村竹之丞座の芝居で宗因と芭蕉とが偶々初めて相會し、ある人が「子はまさりけり竹之丞」といふ句の上五文字を置きかねて居たのに、宗因が即座に「おや／＼／＼」と冠して與へたので、芭蕉が大にその奇才を稱嘆したといふ逸話である。しかしこれは勿論文獻的に確實性の存するものでなく、又芭蕉が若い時宗因と共に九州旅行をしたといふ如きも、全く妄説とする外

はない。このやうに從來の諸説は、すべてそのままには信じ難いものであるが、すでに芭蕉自ら「上に宗因なくんば、我々の俳諧は今以て貞徳の誕をねぶるべし」といひ、一時は談林の風調に心酔しきつたのであるから、彼が宗因への接近を望んでゐたであらう事は、當然考へられねばならぬ。延寶三年に於ける宗因東下の好機を、芭蕉が空しく逸する筈はなかつた。芭蕉がこの時宗因と一座したのは、礎畫といふ人——僧侶であつたらしい。——の許で、その座には幽山・信章・似春等もあつた。さうして宗因の發句、礎畫の脇に始まつた百韻一卷が興行されたのである。

(寫本『談林俳諧』所載。拙著『俳諧史の研究』參照。)この一卷の存在によつて、當時芭蕉が親しく宗因に接した事が明かにされるのみならず、幽山・信章・似春等と相識るに至つて居た事も知られる。また「桃青」の號もこゝに始めて見られるのである。恐らくこの新しい號は、延寶三年五月以前あまり久しくない頃から用ひられたのであらう。桃青の字義の據る所については、種々の説が行はれて居るが、いづれも臆測の程度を出ない。しかし青年の客氣なほ去らず、談林の新風に呼應しようとした際の事であるのを思へば、李白に對した一種の俳諧的命名であつたと見るのが、最も真相に近いのではあるまいか。滑稽の中におのづから氣を負ふ姿が見られるのである。

芭蕉が宗因と相會した事は、彼の俳諧生活にどれほど大きな刺戟を與へた事であつたらう。古

風から新風への轉向に拍車をかけた事は言ふまでもない。翌延寶四年の二月、信章（山口素堂）と兩吟した「奉納貳百韻」の第二卷卷頭には、

梅^(一)の風俳諧國に盛んなり

信章

こち^(二)とうづれも此の時の春

桃青

〔註〕（一）梅翁即ち宗因の俳風。（二）我々ども。一句は自分たちもこの談林風の盛んな春を謳歌しようとの意。

とまで梅翁の風に傾倒して居るのである。夙く『貝おほひ』にあのやうな清新輕妙な才を發揮した芭蕉のことである。彼が俳壇の新しい動きに對して、敏感な反應を示さずに居る筈がない。のみならず古風の俳諧は、すでに全く時代の支持を失つて居る時なのだ。延寶三、四年の頃、芭蕉がかうして談林の作家としての自覺を深めたとしても、それはむしろ當然の歸趨にすぎなかつた。それよりは芭蕉の一生にとつて、そして我が俳諧文藝の歴史にとつて、極めて重大な契機がこの間に潛むことを見遁してはならない。青雲の志を抱いて江戸に出てから、はやくも三四年を経過したこの頃、芭蕉はなほ定まる職もなければ、定まる家すらもなかつたらしい。勿論これらの點については、今日これを考へるべき確實な資料は全くないのであるが、少くとも當時の芭蕉の生

活が、世間的な成功への道に踏み出して居たとは思はれない。こゝで我々は徒らに臆測を逞しうする事は避けよう。けれども「笈の小文」の冒頭や「幻住庵記」の一節に於ける述懐が、彼の過去のいつの日と最も關聯をもつべきかを思へば、やはり江戸出府後の教年間にこそ、さうした烈しい内的苦悶の時代を想定せずには居れないであらう。もとよりその苦悶は一時的のものではなかつた。彼が「たゞ此の一筋に繋がる」ことを觀するまでには、その後もなほ多くの克服すべき誘惑に曝されたにちがひない。しかしその最初の決意の日こそは、最も記念せらるべき時である。彼の詩人的な性格が——勿論武士的な教養、悲劇的な運命など、さまざまの要素がなほその間には混じて居たわけであるが、——世俗的な欲望と對立して、「是非胸中に戰うて、これが爲に身安からず」と言つた烈しい争闘に惱んで居る際に、談林の新風がいかに強い魅力をもつて彼を捉へたか。「いと若き時よりよこざまにすける事侍りて」であつたその數寄心は、こゝに強い決意となつて現はるべき契機を得たのである。

延寶四年夏、芭蕉は郷里伊賀に歸つた。竹二坊の『芭蕉翁正傳』によれば、六月二十日頃伊賀に來て、同年秋東武に歸つたといふ。又竹人の『全傳』にも旅中の吟三四を録してある。この歸省が何の爲であつたかは、考據のよしがたい。けれども若し前に述べた如く、談林新風の刺戟が

芭蕉のすき心に、ある決意を齎らしたものであるとすれば、その間の消息はほど窺へないではない。即ち彼が出府の當初抱いて居た「しばらく身を立てん事をねがふ」生活方針を一抛すべく、郷里の肉親故舊にはかる爲だつたのではあるまいか。恐らくは又それに關聯して、彼の身邊にまつはる家族的係累の處置をまかねて居たであらう。もとよりそれは單なる推測に止まるが、再び江戸に歸つた後の芭蕉が、いかに飛躍的に著しい俳壇的活動を示して居るかを見れば、こゝに彼の生活の一轉機があつた事を想はないわけには行かぬ。少くとも再東下後に於ける芭蕉の生活には、俳人として立つに至つたさまがはつきり認められるのである。

延寶五年以後の芭蕉の年譜はやゝ明かになつて来る。それは俳諧の撰集の上に殘した彼の足跡が、數多く見出されるやうになつたからである。延寶五年には内藤風虎侯の發企になる「六百番俳諧發句合」に加はつて、二十番の勝負を争つて居る。かの「江戸三吟」百韻三卷の中

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁

桃 青

寒さしさとつて足の先まで

信 章

居合拔霞の玉やみだすらん

信 德

に始まる一卷も、この年の冬成つたのである。(從來知られて居る重徳「江戸三吟」には、「延寶六戊午年編生仲句」とあり、かつ右の發句が「六百番俳諧發句合」に入つて居るのから見て、)

この一卷は延寶五年冬の興行たる事は明かであるが、なほ江戸三吟と奉納百韻とを合せ收めた神田堅大工町書林山内氏長七開板の一本——これは重徳板とは全く別板である。重徳板との前後は明かでないが、やはり延寶當時の開板である事は板式等から見ても疑ない。——には、右の一卷に「延寶五之冬」と題してある。然るに住よその年代を誤つたものがあるのか、こゝに附言しておく。) 延寶六年には信章・信徳との三吟百韻二卷が更に成り、前

年冬の一巻と合せて『江戸三吟』が刊行された。又この年七月、松花軒二葉子の名で撰ばれた『江戸通り町』には、桃青の發句で二葉子・紀子・卜尺四吟の歌仙一卷が收められた。ついで十一月に刊行された青木春澄撰の『武藏十歌仙』には春澄・似春と三吟の歌仙三卷があり、『芝肴集』に收められた似春・四友との三吟百韻二卷も延寶六年秋の作と推定されて居る。その外杉風との兩吟百韻一卷(天明六年芭蕉の草稿真蹟のまゝ、出版された。)も、その中の附句が『江戸廣小路』に採録されて居るので、恐らく延寶六年——もしくは五年——の作であるべく、『一葉集』所收「わすれ草菜飯につまん年の暮 桃青」を發句とする千春・信徳との三吟歌仙一卷も、その中の附句が延寶七年刊『一葉集』に採録されて居るので、延寶六年中の興行でなければならぬ。かうして芭蕉が俳諧の席に列した度数はかなり多いのみならず、同じ年の刊行たる言水の『江戸新道』、不卜の『江戸廣小路』等に發句・附句の入集を見た。なほ寫本として傳はつて居る十八番の句合(六番句合と十二番句合との二部から成り、その作者は明かでない。芭蕉の判詞の終に「延寶六初冬日、坐興庵、桃青、素宣」と識されてある。)には、芭蕉がその判者を勤めて居る。

延寶六年に於ける芭蕉の俳諧生活が、このやうに多忙に暮れたのに引續いて、延寶七年も亦

『江戸蛇之鮓』、『玉手箱』、『坂東太郎』等にその活動のあとが窺はれるが、延寶八年に入つて芭蕉の俳壇的地位は全く確立するに至つたと言つてよかつた。即ち『貝おほひ』について芭蕉の第二撰集とすべき『桃青門弟獨吟二十歌仙』二巻が、この年四月に刊行されたのである。それは杉風以下ト尺・嵐蘭・嵐亭(嵐雪)・螺舎(其角)等の門弟二十人の獨吟一卷づゝに、館子の獨吟一卷を追加として、都合二十一巻を収めた集で、かうして世に示すに足るだけの作をなすに堪へる門弟が、すでに二十人を數へたといふ事は、芭蕉の俳壇的地位がかなり高く認めらるべき事を、有力に物語るものでなければならぬ。特に其角・嵐雪の如き優秀な門人を擁してゐた事は、言ふまでもなく非常な強味であつた。其角の芭蕉入門は延寶初年であつたといふが(五元集序)、其角自筆の年紀(淡島の其角所載)によれば、彼が『桃青門弟獨吟二十歌仙』に收められた一卷を獨吟したのは、延寶五年十七歳の時の事である。按ふに杉風や其角が芭蕉に教を受けたのは、芭蕉東下後間もない頃からであつたらうが、正式の入門はやはり延寶四年秋芭蕉が郷里から再び江戸に歸つた後の事ではあるまいか。それはともあれ二十歌仙の選集は、かうして延寶五年頃から企てられ、八年に至つてその完成を見たのであらう。而して同じ八年には又其角の『田舎の句合』と杉風の『常盤屋の句合』が、芭蕉の判詞を得て公けにされた。——其角自筆の年紀によれば、共に延寶六年

の作であるといふ。——かうして江戸の俳壇に於ける芭蕉の聲望は漸く高く、門人たちも

桃青の園には一流ふかし(獨吟廿歌仙中嵐蘭の獨吟の揚句)

と自ら誇り、又かの『獨吟二十歌仙』は後世「芭蕉翁の花」(若葉合談)とも稱せられたのである。

再東下後に於ける芭蕉が、全く俳諧師として立つに至つたであらう事は、以上に述べた事から十分観察されるのであるが、この間に彼が小石川の水道工事に従つた事が傳へられて居る。これに關する所傳は種々あるが、その中最も考據に資すべきは、『風俗文選』の芭蕉傳に「嘗世爲遺功、修武小石川之水道、四年成、速捨功而入深川芭蕉庵出家、年三十七」とある記事である。芭蕉の三十七歳は延寶八年に當る。即ち彼は延寶五年から八年まで四年間、水道修工の事に關係して居たわけである。こゝで新たに疑問が生ずるのは、延寶四年の歸省が果して前に考へた如く、世俗の欲望を一抛すべき轉機となるものであつたかといふ事である。むしろ水道工事によつて功を立てようとする爲の、準備的行動でなかつたらうかとさへ見られる。もしさうだとすれば、延寶五年以後の芭蕉の俳壇的活動も、結局彼の餘技にすぎなかつた事になるのであるが、しかし芭蕉の俳諧はこの時決して餘技では有り得なかつた。それについて注意されるのは、野口在色の遺稿『俳諧解脫抄』に、

中頃桃青と名乗て東府に吟ひ、此の道の宗匠を望み、萬句の會を催しける。予わけてとりもちて成就しけり。

と傳へて居る事である。「中頃」とのみではその時代が定かでないが、延寶七年四月に成つた岸本調和撰の『富士石』に、

桃青萬句に

三吉野や世上の花を目八分

等 躬

といふ一句があるので、この萬句興行が延寶七年四月以前であつた事が知られる。當時萬句の興行は、俳諧の宗匠たるべき重要な一資格とされて居たので、芭蕉にさうした催しがあつた事は、即ち彼が「此の一筋に繋がる」べき決意を、世間的な形式で発表したものに外ならない。在色は江戸談林に於ける有力な一人であつた。それらの人々の後援の下に萬句興行が成就すると共に、宗匠としての芭蕉の地位は公に認められた。延寶末年の芭蕉の俳壇的活動が、餘技であるべき筈はなかつたのである。それでは彼がその間俗務に携はつたのは何の故であつたか。その解釋は、二世卜尺の談に「しばしが程のたつきにと、縁を求めて水方の官吏とせしに」(『奥細道書成抄』の「芭蕉翁傳」)とあるので十分であらう。工事に關しての芭蕉の地位も、さして高いものであつたとは思はれない。

『筠庭雜錄』に引用した延寶八年の「役所日記」によれば、一定の日だけ出勤して現場の事務・監督等に當つたものらしい。要するに衣食の費を得る方便に過ぎなかつたのである。

五、芭蕉庵

延寶九年（天和元年）は芭蕉の俳諧生活にとつて、次に極めて重大な一轉機たるべき時であつた。芭蕉の俳諧が眞に文藝的な自覺によつて反省され始めたのは、實にこの頃からである。この年六月言水の『東日記』が刊行された。この書は才膺の序に、「これより先三たび句帖を顯はし、三度風體をかへて三たび古し」と言水が閑語した事を述べて居る通り、當時の俳壇に於ける革新的な機運を反映したものであつたが、その中に見られる芭蕉の作には、

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

いづく時雨傘を手にさげて歸る僧

藻にすだく白魚やとらば消えぬべき

等の如く、從來の談林調とは著しく異つた傾向を示して居るのである。後世枯枝に鳥の吟を以て、蕉風開發の第一聲とするものがあるのも、必ずしも當らないのではない。尤もこの句では、枯枝にとまつた鳥を自然の風景として眺めるよりは、それを秋の暮の道具立として見る事に興味の中

心が置かれてあり、後に「鳥のとまりけり」と改めた場合の如く、素直な客觀の句としてはなほ表出されて居ない。のみならず中七を字餘りに仕立てた所にも、談林の臭味が多分に感ぜられる。けれどもこゝにはもはや縁語掛詞の技巧や、觀念的な譬諭の遊戲は見られない。寒鴉枯木の閑寂味をそのまゝに捉へて、そこに理智的な解釋の媒介を必要として居ないのである。更に晚歸の僧に時雨を憶ふ枯淡な情趣、手に取らば消えるかと疑はれる白魚の繊細なあはれ等にしても、それらの何處に理智的なをかしみの要素が見出されるであらうか。それは俳諧の文藝性に對する從來の考へ方から見て、確かに驚くべき變化と言はねばならなかつた。『東日記』それ自體がすでに何等かの新しい風體を求めようとする動きに外ならず、又その中には

笹折りて白魚のたえく青し

才丸

の如き、新鮮なそして正當な詩美への開眼すらも見出されるのであるが、その全體的な志向はなほ依然として理智を基調とした線の上に延びて居る。才膺の句にしても、元來白きを言ふべき白魚を、「青し」と形容した逆説的敘述の中を、をかしみが期待されて居るのである。勿論芭蕉自身の作にしたところで、『東日記』に入集した總計十五句の中、その大部分は談林的特質を離れては鑑賞し難いものであつた。けれども『東日記』全體がなほさうした微溫的な動きに止まつて居た間に、

たとひ二句にせよ三句にせよ、芭蕉の作に閑寂・枯淡・繊細等の美意識がそのまゝ俳諧の内容として取入れられて居るといふ事は、こゝに時代的な推移の外に芭蕉の個人的な問題が考へられねばならぬ。

芭蕉の個人的な問題とは何か。それは彼の精神生活に於ける厳しい自省の念に基くものであつた。すでに此の一筋に繋がるべき決意はなされたのであるが、彼の身邊にまつはる種々の現實は、決意の遂行に決して順調には伴はなかつた。藝道に對する純な氣持が募れば募るほど、俳諧を一つの遊びとする談林的志向に慚らなくなるのは當然であると共に、俳諧師としての自分自身の生活を省みた時、世間的な慣習に倣つて萬句を興行したり、衣食の資を得る爲に俗務に携はつたりして來た事が、烈しい嫌惡で見られねばならなかつた。その間彼は「ある時は進んで人に勝たむ事を誇」らうとする客氣を抑へ難く、しかも「暫く道を學んで愚を曉」らうとする願ひにも燃えた。そして結局彼が人間として生きるべく見出した道は、自分の人間を西行・宗祇の系譜の中に置くことであつたのだ。同時に俳諧の文藝性をも、また和歌・連歌の傳統の外には求め得ない事を知つた。俳諧の文藝性に對するこのやうな自覺については、行詰つた談林の崩壊作用の中から反動的に生れた時代の機運を、もとより看過する事は出來ない。けれども芭蕉自身の場合にあつて、

何よりも彼の人間がこの自覺をより熱烈により純真ならしめた。その故にこそ同じ時代の歩みをつゞけながらも、言水や才膺の止まる所に止まつて芭蕉は満足し得なかつたのである。それは單に天分の優劣や努力の多少だけによつて解釋されるべきものでなく、實に彼等の人間の問題に多く係はつて居る事を知らねばならぬ。

嚮に延寶四年の歸省について述べた際、恐らくは家族的係累の處置をも兼ねて居たであらうと推測した。更に今姑く想像のまゝに語ることを許されたい。芭蕉は一度青雲の志に望みを絶つて、俳諧師たるべき事を決心はしたものの、それは直に世間的な生活のすべてを捨て去らうとしたのではなかつた。といふよりも、假に彼の決心がそこまで固められて居たとしても、周囲の事情はそれを許さなかつたのである。江戸に出る時郷里に残しておいた彼の係累——壽貞とその子供は、一日も早く彼の許に迎へとられる事を待ち望んで居たであらう。芭蕉は彼等の期待して居た通りの世間的職業や地位にあへてつかなかつたにせよ、彼等を扶育するだけの責任は果さねばならない。故郷の兄は決して富んでは居ないのだ。かうして延寶四年秋江戸に歸つた時、芭蕉は家族を養ふ爲の生活をして行かねばならなくなつて居た。彼が世間並に萬句を催して宗匠を望み、水道工事の俗務に携はつて小吏に伍したのも、恐らくは彼の本意とする所ではなかつたので

あらう。又一時はそれが必ずしも道の妨げたるものとは考へられなかつたかも知れない。けれども彼が此の一筋の繋がるべき道について深く省み、そして西行的・宗祇的な人間へのあこがれに燃え上る自分を眞に知つた時、すべての世間的生活はもはや彼にとつて堪へ難いものとなつて居た。水道工事の完成と共に彼の俗務も終つた。この機會に彼は更に新しい生活に向つて、再度の決意を固めたのである。その決意は道の爲に戦ふべく、誠に雄々しくも勇ましいものであつた。けれどもそれは又いかに悲しい運命の姿でもあつたか。芭蕉は遂に彼の愛する係累を捨てねばならなかつたのである。そして獨り淋しく深川の草庵に入つた。

讀者はかうした芭蕉傳を、あまりに無稽な想像として一笑に附するであらうか。もとより史實的資料の存しない事である。臆測に臆測を重ねる事は、夢を説く愚かさにも等しいかも知れない。けれども歴史はその客觀的なあり方のまゝでは、所詮一の自然現象にすぎない。それが人間の事實として理解される爲には、必ず統一した主觀の解釋を経ねばならないのである。この場合客觀的に知られた事實が精確であればある程、主觀の解釋が真相に深く觸れて行くべきは言ふまでもないが、すでに客觀的事實の精確さに限度がある以上、想像といひ臆測といふのも結局は解釋上の程度問題に外ならぬ。芭蕉といふ一箇の人間——勿論俳人、文藝人としての人間の成立を明かにする事が、芭蕉傳の任務であるとするならば、客觀的事實に關する資料の不備な故を以て、當然試みねばならぬ解釋を放棄するのはむしろ怠慢であらう。延寶末年に至つて芭蕉の俳風に一變すべき兆を見たのは、勿論俳諧の文藝性に對する眞摯な反省の結果ではあるが、それにしても時代はなほ談林の餘臭の中に低迷して居た。のみならず俳諧の文藝精神が和歌・連歌の傳統の下に確立された時でも、俳諧がその發生の日から持つた喜劇性は、俳諧の特質として失はれる事はなかつた。蕉風俳諧が庶民的な生活様式に根ざす卑近通俗さの中に、あはれや幽玄に通すべき新しい文藝美を見出した事は、貞門・談林の俳諧に於けるをかしみの内面的擴充もしくは深化に外らなかつたのである。即ち俳諧が和歌・連歌と對立すべき本質的なものとされる通俗性は、やはりをかしみに於いて理解されるものであつた。少くとも芭蕉の時代に於ける一般の文藝意識としては、俳諧は多分に喜劇性をもつものでなければならなかつた。芭蕉自身ももとよりこの俳諧の特性を否定したのではない。

景清も花見の座には七兵衛

麥飯にやつるゝ戀か猫の妻

等のをかしみを、彼はやはり俳諧独自の境地として育てて居るのである。芭蕉の所謂寂・堯の俳

諧は、『去來抄』等にも説かれてある如く、決して素材内容の寂しさを哀れさに依存するものではなかつた。華やかさ、賑やかさ、可笑しさ等々の中にも寂・葉はある。芭蕉が諧謔と微笑とに哀傷と悲涙とを置き換へる事を以て、俳諧の新意義としたのでない事は明かである。にもかゝらず、延寶末年の

艚の聲波を打つて腸氷る夜や涙

の如き作から、枯野の辭世吟に至るまで、いかに悲寥哀愁の色が濃く彼の作品にまつはりついて居る事だらう。そこに我々は芭蕉の人間に於ける悲劇を感じずには居れない。さうして今芭蕉の傳記に、想像のみから生れた數行を加へた。後日確實な資料の發見によつて、この數行は全く抹殺されるかもしれない。けれども芭蕉の人間的成立を解釋すべき方向への指示として、それは決して無用の想像ではなかつたであらう。

芭蕉が深川の草庵に入つたのは延寶八年の冬であつた。その年時についてはなほ異説もあるが、文獻的な考證の結果から言つても、又『東日記』に見られた句風の變化から考へても、入庵の時は必ず延寶八年中であつたにちがひない。その庵は杉風の下屋敷であつたと傳へるが、彼の所有になる生洲の傍にあつたといふから、恐らくは生洲に附設した番小屋を、やゝ雅致多く作り

なした程度のものであつたらう。とにかく芭蕉は市中の喧を避けて、一人靜かにこゝに落着く事になつた。

九年の春秋市中に住みわびて、居を深川のほとりに移す。長安は

古來名利の地、空手にして金なきものは行路難しといひけむ人の

かしこく覺え侍るは、この乏しき故にや

柴の戸に茶をこの葉かく嵐哉（續深川集）

といふのが、移り住んだ當時の吟であつた。彼の詞書の中にも、彼が世間的な生活を清算して、貧に安んじつゝ藝道に身を委ねようとする決意は窺はれるのである。翌延寶九年の春、門人李下から送られた芭蕉一本を庭に植ゑて、

ばせを植ゑてまづにくむ萩の二葉哉（續深川集）

と言つた。その芭蕉が風土に適うたのであらうか、次第に莖を増し葉を重ねて庭を狭める程にもなつたので、いつともなく人々はそこを芭蕉庵と呼んだ。（文章篇「芭蕉を」移す詞参照）そして庵の主をもおのづから芭蕉庵の翁・芭蕉翁等と言ひならはし、遂に芭蕉自身もまたこれを號とするに至つたのである。芭蕉庵に入つてからの芭蕉の生活は、もはや俳諧がその全部であると言つて宜かつた。彼は道

の爲に始めて安住の所を得た思ひがしたであらう。入庵後最初に彼の俳諧生活を窺ふべき『東日記』中の句については、すでに述べた。それについて更に注意すべきは、同年七月に刊行された『俳諧次韻』である。これは伊藤信徳等七人の連衆で催した百韻七巻と五十韻一卷を収めた『七百五十韻』（延寶九年正月刊）を次いで、これを千句に満尾する爲に、新たに二百五十韻を興行したものである。この度の連衆は桃青・其角・才丸・楊水の四人であつた。按ふに當時信徳が京都にあつて、俳風の革新に志して居たのに呼應して、芭蕉自ら次韻を主催したものであらう。もとより連句は芭蕉一人の作ではないから、こゝには發句程直接に芭蕉個人の面目を窺ふ事は出来ない。又連句そのものの性質から言つても、——一卷の捌きには芭蕉の主張が多分に與つて居たにせよ、——直ちに著しい轉向を試みる事は困難である。だから『俳諧次韻』はこれを當時の他の作品に比して、甚しく異つた特色を示したものと云へないが、例へばその第三巻の最初の數句、

世にありて家立は秋の野中哉

才丸

詠置く月に株萩を買ふ

楊水

哀れとも茄子は菊にうら枯れて

桃青

鮎さび寸たり海鼠漸く

其角

雪の客雲の客とふるまへば

楊水

蘇鐵の亭に題を設くる

才丸

を見ても、『虚栗』『冬の日』等の風調への接近が、はやくもこゝに感ぜられるであらう。後年蕉門の徒にして、『次韻』を蕉風の開基に擬するものがあるのは、なほ當を得た見解とは言へないが、少くとも談林の遊戯文學的な附合つけあひの仕方から、一步を轉じて居る事は明かに認められる。その意味で『次韻』はやはり蕉風の展開史上、重要な一時期を劃するものと言つてよかつた。（因にいふ、其角十七回所載其角自筆の年紀によれば、次韻の興行を延寶八年のこととしてある。さうすると『七百五十韻』の出版以前に興行された事になるが、同じ連衆で残りを次いだといふならとにかく、全く異つた土地で、——七百五十韻は京都で催された。——異つた連衆が、その公表以前にこれを次ぐといふ事は、常識的に考へても變である。やはり次韻の興行はその出版され、延寶九年秋の事とするのが穩當である。其角の年紀は記憶の誤と見る外はない。）

天和二年三月大原千春の撰になる『武藏曲』（ムサシノリ）が出た。千春は京都の人、江戸に遊んで同志の吟友と唱和し、これに諸家の發句を併せ録して、歸洛の後梓に上したのである。千春は芭蕉の門下ではないが、卷頭には翁の敬稱を用ひて、

梅柳さぞ若衆かな女かな

芭蕉翁 桃 青

の一句が掲げられてあり、芭蕉に服して居た事が窺はれる。これはもとより芭蕉の實力の然らしめた所であり、江戸俳壇に於ける彼の聲望を示すものではあるが、當時まだ三十八九歳の芭蕉が、

しかも他門の人から翁と呼ばれたのは、彼の只管隱閑を楽しむ生活の中に、早くも老を感じらるべきものがあつたからであらう。『老の樂』によれば、芭蕉は四十歳前後の頃、すでに六十餘りの老人のやうに見えたといふ。だがそれは彼の外貌ばかりではない。この『武藏曲』に現はれた彼の句には、『東日記』に比して閑寂哀愁の氣が入加はつて來たのを覺えるのである。かの「櫓の聲波を打つて腸氷る夜や涙」をはじめ、

わびて住め月佗齋が奈良茶歌

芭蕉野分して盃に雨を聞く夜哉

等の如き、彼の生活の外内面をとくに語るものがある。

こゝに暫く安住の所を得たと思つた芭蕉庵も、天和二年十二月二十八日の急火に焼かれ、芭蕉は纔かに身を以てのがれた。其角の「芭蕉翁終焉記」には、これについて「天和三年(二年)の冬、深川の草庵急火に圍まれ、潮にひたり筈をかづきて烟のうちに生き延びけん、これぞ玉の緒のはかなき初めなり。爰に猶如火宅の變を悟り、無所住の心を發して、その次の年夏の半に甲斐が根にくらして富士の雪のみつれなければと、それより三更月下入無我」といひけん昔の跡に立歸りおはしければ」と言つて居る。芭蕉がその後生涯を旅と觀じつゝ旅に終つたのを見ると、こゝに

無所住の心を發したといふのは、誠にさもと首肯されるのである。自ら西行・宗祇の跡を趁はうと決意した時、すでに漂泊の思ひは胸に浮んだであらうが、眼のあたりこの猶如火宅の變を見ては、更に深く感ずる所があつたにちがひない、さてその翌年甲斐に遊んだ事については、佛頂和尚のゆかりによつて六祖五平といふ者があるとした由が、『隨齋諧話』(文化十三年夏目成美著)に傳へられて居る。この書は後世のものであるから、なほ確實性を缺く點はあるが、著者成美の學識から見て甚しく杜撰な所傳とは思はれない。佛頂和尚は常陸國鹿島の根本寺の住職で、芭蕉の參禪の師である。和尚は根本寺と鹿島神社との係争解決のため、江戸に出て久しく留つて居たので、——恐らく深川の長慶寺に寄寓して居たのだらうと言はれる。——その間に芭蕉は參禪するに至つたのである。而して『隨齋諧話』によれば、その因みは芭蕉庵焼失以前から結ばれてゐたわけで、按ふに芭蕉が和尚に見えたのは芭蕉庵に入つてすぐではなかつたらうか。芭蕉が進んだ一筋の道は、直ちに佛籬祖室の扉に入るものではなかつたけれども、彼が造化に歸る事を以て風雅の所詮と觀じたのは、やはり一の宗教的悟入であつた。そこまで芭蕉の人間と藝術とを導く上に、彼の參禪は大きな役割を持つた事であらう。しかし禪と俳諧に於ける心境の相通は、むしろ一般的事問題に近い。たゞ芭蕉の場合、彼が禪に參して居る折から、偶々猶如火宅の變に遭うたといふ事

は、彼が一生を旅の間に送り、旅に死なうと願つた心との關聯に於いて、特に注意されるのである。「野ざらしを心に」の旅は、すでにこの時深く彼の心に期せられて居たにちがひない。

芭蕉庵は山口素堂を初め知友門人等の喜捨によつて、天和三年冬の頃再び成つた。當時再建勸化簿の序並に寄附の人名を記した素堂の眞蹟が、『隨齋諸話』の中に摸刻されてある。その寄附額は最も多いものでも銀拾五匁、少いのは破扇一柄といふのもある。かうして成つた新庵であるから、それは誠にさゝやかなものではあつたらうが、芭蕉にとつては門友の温い志の贈物として、舊庵にもました住心地でなければならなかつた。

ふたゝび芭蕉庵を造りいとなみて

霞聞くやこの身はもとの古柏(續深川集)

と吟じて、それから奥の細道の旅に出るまでは、こゝを貧に安んじ閑をあまなふ栖としたのである。もとよりその間も彼は度々旅に出て居るが、それでもこの再建の芭蕉庵に暮した日数は、通じて三年半に及んで居る。恐らく彼が江戸に出て以來、最も長く定住した家であつたらう。庵の生活はもとよりわびしいものであつたが、薪水の勞を助ける門人たちも少くなかつた。『雪丸げ』(會良遺稿)に載する「深川八貧のうち」の

米かひに雪の袋や投頭巾

ばせを

其薪買

雪の夜はとりわき佐野の薪買はん

依水

其酒買

酒やよき雪ふみ立てし門の前

苔翠

其炭買

炭一升雪にかざすや山折敷

泥芹

同じく茶買

雪に買ふ噓子ごとせよちやん袋

夕菊

同じく豆腐買

手にすゑし豆腐をてらせ雪の月

友五

等の句によつても、師弟和樂の間に清貧を樂しんださまは窺はれるであらう。中にも會良は庵の近くに住んで、朝夕師に仕へる事が厚かつた。

芭蕉庵の再建が成るよりも先、かねて其角の手で撰ばれて居た『ミナシゲリ虚栗』が世に公にされた。こゝ

の書はその精神に於いても、又その實質に於いても、眞に蕉門の代表的撰集とするに足るべき最初のものではあつた。芭蕉は「天和三癸仲夏日 芭蕉洞桃青鼓舞書」と壯んな意氣を見せて、自らこれに跋を書いて與へて居る。而してその跋文の中には、

李杜が心酒を嘗めて寒山が法粥を嚼る。これに仍つてその句見るに遙にして聞くに遠し。佗びと風雅とその生にあらぬは、西行の山家をたづねて人の拾はぬ蝕栗也。戀の情盡し得たり、昔は西施が振袖の顔、黄金鑄、小紫、上陽人の閨の中には衣桁に蔦のかゝるまで也。下の品には眉こもり親ぞひの娘、娶姑のたけき争ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨てず、白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。

と言つて、李杜の詩腸を探り西行の風雅を訪ねる事が、即ち俳諧の本意である事を明かに示したのである。これは俳諧の文藝理念を直に漢詩や和歌と同一の所に求めたものであるが、元來俳諧を導くのに和歌・連歌の理念を以てするのは、すでに貞門・談林時代からの事であつた。けれども貞門・談林の指導的立場は、單に俳諧のをかしみに於ける通俗性自由性に、ある文藝上の限界を設けようとする形式的消極的なものにすぎなかつた。例へば甚だしく下品な用語や、あまりに新奇な素材を禁ずるといふ程度に止まり、俳諧のをかしみそれ自體を文藝的に止揚すべき精神と

しては見られなかつた。然るに芭蕉は俳諧の通俗性と自由性とを詩的境地の擴充と解することによつて、をかしまの質と意義とを全く變へてしまつた。即ちこれまで専ら用語と素材の通俗性に依存して、理智的形式的にのみ解釋された俳諧のをかしみは、今度は和歌や連歌と異つた特殊の文藝美として見出されたのである。しかもその美の理念とする所は、和歌・連歌と異なるべきものではなかつた。

髭風を吹いて暮秋歎ずるは誰が子ぞ（虛栗）

こゝでまづ芭蕉が捉へたものは漢詩的な境地である。それはもはや從來のをかしまの意義を失つて居るが、そのかはり和歌・連歌とちがつた詩境である點に俳諧性は保たれて居る。而して俳諧の世界は、勿論かうした漢詩的境地に限られるのではない。戀の情には西施・上陽人から、更に寺の兒・歌舞伎若衆までも捨てないといふのが、即ち俳諧の自由であつた。それはしかし上陽人といひ、歌舞伎子といふやうな漢語・俗語の使用に基く通俗性や自由性ではない。それらの戀の情にまで汎く擴充された詩境についての謂ひである。さうしてその詩境を律する理念は、和歌・連歌に於ける物のあはれや幽玄と異なるものではなかつた。そこに俳諧の通俗性とをかしみは、新たな文藝的意義を確立し得たのである。このやうな芭蕉の俳諧精神は、『笈の小文』のかの名高い

一節「西行の和歌に於ける云々」(文章篇)の風雅觀に至つて、更に徹底的に説かれたのであるが、その精神の根柢はすでに『虚栗』の時代に置かれて居たのである。それは芭蕉が深川に移り住んで以來、思を潛め心を苦しめて求め得た確信であつた。

六、旅

貞享元年秋八月、芭蕉は門人千里^{ちり}を同伴して郷里伊賀へ旅立つた。恐らくその前年歿した母の墓に詣でる爲であつたのだらう。けれども今度の旅は、芭蕉にとつてむしろ旅そのものが目的であつた。西行の旅、宗祇の旅、彼の心に浮ぶものはさうした旅の姿であつた。さうして彼自身また西行として、宗祇として、風雅の神を旅の間に求めようとしたのである。江戸を立つ日、彼は野ざらしを心に風のしむ身かな

とよんだ。この時彼は既に旅に死する事を覺悟して居たのである。『虚栗』の跋文を鼓舞しつゝ書いた芭蕉の意氣は、こゝに再びこの悲壯な決意となつて現はれたのであつた。既に俳諧の新たな文藝的意義について明かな自覺を得ながらも、その實體はなほ確かに捉へられて居るとは言ひ難い。かの跋文に述べた理念を、いかに實踐すべきかは彼に残された大きな課題である。彼はその頃何かしら落ちつかない焦燥に悩まされて居たのではなからうか。今は深川の草庵も彼にとつて風雅の安らかな居所ではなかつた。旅へ、旅へ、彼の心はかり立てられるやうであつた。そこで

何かを捉へて歸らう。もし捉へられなければ——いや確かに捉へるまでは、何處までも、そして死ぬまでも旅をつゞけよう。さうしたせつば詰つた心で、彼は旅立つたのにちがひない。」

旅程は東海道を経てまづ伊勢に立寄り、九月の初故郷に歸り着いた。延寶四年に歸郷してから九年ぶりである。「北堂の萱草も霜枯れて今は跡だに無」く、母の遺髪にたゞ涙を濺ぐだけであつた。親戚故舊の面もひどく變つて居た事であらう。芭蕉自身もすでに初老を越して居る。壽貞とその子は當時伊賀にあつたと思はれる。貞享初年頃——恐らくこの旅から江戸に歸つて後か。

——兄半左衛門に送つた芭蕉の手紙の中に、「一はあねの御恩難有」といふ言葉があり、これは按ふに芭蕉身邊の係累について、姉が世話をしてくれた事を言ふのではあるまいか。勿論それは極めて根據の薄弱な推測にすぎないが、ともあれ故郷は彼にとつて心を傷ませる事のみが多かつた。それから大和の方へ行脚して、千里の舊里竹の内村に暫くとどまり、こゝで千里に別れて一人吉野の奥に辿つた。西行の庵した跡を尋ねては、特に感慨が深かつたであらう。大和から山城・近江・美濃と經て、長途の雨に破れた笠を頂き、木枯の風に吹送られて尾張の國に入つた。此處で

狂句木枯の身は竹齋に似たるかな

を卷頭の句とした尾張五歌仙が成つた。即ち『冬の日』である。連衆は芭蕉の外、野水・荷兮・

重五・杜國・正平・羽笠等であつた。かうして旅寢ながらに年も暮れ、貞享二年の春は故郷に歸つて迎へた。しかし今度もまた長く止まらうともせず、奈良に赴いて二月堂の水取の儀を觀、京に出て秋風の別墅を訪ねたり、伏見の任口上人に逢つたりした。それから近江・美濃を過ぎて再び尾張に入り、木曾路から甲斐を経て、卯月の末頃庵に歸つて旅の勞れを晴らした。

前後九ヶ月に亙るこの旅で、芭蕉が得たものは『野ざらし紀行』と『冬の日』とであつた。而して彼が出發の際ひそかに期した所は、この二つの大きな收穫によつて十分達せられたと言つて宜い。

馬に寢て殘夢月遠し茶の烟

牡丹蕊深く分け出る蜂のなごり哉

等には、なほ『虚栗』時代の漢詩調や字餘りの風を残して居るが、しかしそれとても甚だしく佻偏なものではない。のみならずその大部分は、もはや漢語の使用と漢詩の境地のみに長く止まるものではなかつた。例へば

消えぬ卒都婆にすごくと泣く

荷兮

影法のあかつき寒く火を燒きて

芭蕉(冬の日)

二の尼に近衛の花のさかりきく

野水

蝶は葎にとばかり鼻かむ

芭蕉(同上)

等の附合に於いて、寒とした冬の曉の人影、落魄の身をかこつ涙、それらはむしろ和歌・連歌に屢々見られる情景である。だがこれらの附合は勿論和歌でも連歌でもない。そこには和歌にも連歌にも取上げられなかつた美が、確かに新しく捉へられて居るのである。成程影法・鼻かむ等の用語は雅言ではない。けれどもこれらの句に俳諧独自の境地が認められるのは、決してそのやうな用語の上にあるのではなかつた。焚火にうつる影法師、ひそやかに鼻かむ姿の情趣を見出したのが俳諧の手柄だつたのである。『野ざらし紀行』の中に

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

の句があるが、二見の浦に貝拾ふ女の童のわざは山家集によまれて居ても、麓の流に芋洗ふ女の風情は和歌に逸せられて居る事を、芭蕉はよく知つて居たのだつた。このやうに和歌・連歌に言ひ洩らされた境地を捉へる爲には、俗語——即ち俳言がおのづから用語とされねばならぬが、それは貞門・談林の俳諧に於いて、俳言が俳諧の特性を構成する爲の絶対的要件であつたのとは全く本末を異にして居る。

芭蕉が連歌と俳諧との區別を説いた言葉として知られる「春雨の柳は全體連歌なり、田螺取る鳥は全く俳諧なり。云々」(三冊子)といふのも、蕉風に於ける俳諧性が用語のみに求めらるべきでなく、詞・心・作意の三方面から見られねばならぬ事を教へたものであつた。『三冊子』にはなほ詩・歌・連・俳はともに風雅也。上三のものは餘す所も、その餘す所まで俳は至らずといふ所なし。花に鳴く鶯、餅に糞する縁の先と、まだ正月も可笑しきこの頃を見とめ、又水に住む蛙も古池に飛込む水の音と言ひはなして、草に荒れたる中より蛙のはひる響に俳諧を聞きつけた。見るに有り、聞くに有り、作者感ずるや句となる所は、すなはち俳諧の誠也。

〔註〕(一) 詩・歌・連・俳と四つあげた中の、始の詩・歌・連をさす。(二) 芭蕉の句「鶯や餅に糞する縁の先」

と説いて居る。即ち漢詩と和歌と連歌と、三つの風雅に餘された所を求めるのが俳諧の風雅である。花に鳴く鶯、水に住む蛙の歌は、すでに歌人に見出された美であつた。俳人は餅に糞する鶯、古池に飛込む蛙の美を捉へねばならない。しかもこの美は本質的に、詩・歌・連の美と少しも異なるべきものではなかつた。芭蕉は『虚栗』の跋文に於いて既にこの理を看破つて居たのであるが、通俗卑近な生活の中から、新しく俳諧の美を見出す事は決して容易でなかつた。芭蕉は最初

談林の甚しい卑俗を濟はうとした爲に、まづ漢詩の境地に俳諧を求めようとした。けれどもそれは結局俳諧の通俗性を、その本來の方向に沿うて眞に擴充し得るものではなかつた。西行や宗祇が見残した詩境は、やはり目前の自然と人間との中に、自ら探り自ら味はふ外には至り得ないのである。旅はこの時芭蕉にとつて實に切實な要求であつたらう。『野ざらし紀行』と『冬の日』とは、實にかうした要求の下に彼が達した第一段階であつたのだ。

貞享三年は旅の勞れもあつたのか、たゞ草庵の靜かな生活を楽しんで居た。しかし俳諧はかなり多事であつた。正月には其角の『初懷紙』百韻が興行され、三月には芭蕉庵で催された句合が、『蛙合』と題して上梓を見た。ついで八月には尾張から『春の日』が出た。この書は『冬の日』の連衆であつた荷兮・野水・羽笠・重五の外、新に越人・且蘂等が加はつて興行した連句數卷に、芭蕉を初め蕉門俳人の四季發句五十九句を併せ收めたものである。作者は殆ど尾張地方に限られ、特に連句には芭蕉が加はつて居ないので、『冬の日』に比すればその重要性は遙かに劣ると言はねばならぬ。とはいへその中には、かの名高い

古池や蛙飛び込む水の音

の句も收められ、一般に『冬の日』につゞいて蕉風展開の跡を示す代表的撰集として、早くから

七部集の一に數へられて居る。尤も古池の句は一に天和年間の作だとも傳へられ、又必ずしも世にいふ如く、この句に芭蕉の心眼が始めて開かれたといふべきではない。けれども假にそれが天和年間の作であつたにしても、この年刊行された『蛙合』や『春の日』に至り、始めてこれを世に發表したといふ事は、芭蕉自らこの句に對する確信を得たからだと見られねばならぬ。その意味でこの句の制作は、なほ貞享三年春の事として差支ない。而してこゝにはもはや漢詩調の餘臭は全く無く、芭蕉はたゞ靜に自分の周圍に眼を向けつゝ、その中に深く俳諧の境地を探らうとして居る。さうした芭蕉の指導的態度は、例へば『蛙合』の門人たちの句にも窺はれるのである。

一 蛙あせはしばし鳴きやむ蛙哉

去 來

うき時は藁ひきの遠音も雨夜哉

會 良

こゝかしこ蛙鳴く江の星の數

其 角

等の作を誦すれば、當時蕉風俳諧の向つて居た方向は明かに看取されるであらう。それは又同じく『春の日』に於いても認められる事である。

貞享四年も芭蕉は多く草庵の中に暮したが、八月下旬會良・宗波の二人を伴つて、常陸鹿島に月を觀た。かつてその許に參禪した佛頂和尚が、根本寺に隱栖して居たので、寺に訪ひよつて雨

の月を恨んだりした。その時の紀行が『鹿島詣』(一に『鹿島紀行』)である。彼の旅心はしかしなほ止まなかつたのであらう、この年十月かの『笈の小文』の旅に出立する事になつた。知友門人たちはこれを聞いて、或は送別の俳蕙を設け、或は餞別の詞章を寄せ、「故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覚え」る程、賑々しく芭蕉の門出を送つてくれた。芭蕉自身もまた、

「神無月の初空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して」と言ひながらも、

旅人と我が名呼ばれん初時雨

の吟には、むしろ旅に勇み立つ軽い心が見られる。前の『野ざらし紀行』の折のやうな、つきつめた悲寥の氣は今度はなかつた。これは芭蕉の心もちの上に、前とは非常なちがひがあつたからであらう。一には彼の俳壇的地位が益々高まり、露沾公の如き貴顯の知遇を得、門人の敬慕も一身に集まる概があつたので、些か錦衣歸郷を喜ぶやうな情もあつたかも知れない。けれども彼がさうした世間的の聲望に、安易な満足を表する筈もない。思ふに彼が『虚栗』に唱へた俳諧の理念は、『冬の日』以後着々とその實踐に成功し、今や風雅道の建設に彼は十分の自信を有して居たのである。曩には風雅の實體を捉へねば止まぬ悲壯な決意をしなければならなかつた。が、今度の旅ではすでに捉へたものを、更に深く究めようとするだけの餘裕があつた。『笈の小文』に『野

ざらし紀行』のやうな逼迫した氣分が見られない所以は、さう解せられるのである。

旅程については紀行の本文が詳しく示して居る。たゞし紀行には、都合上事實の順序を前後して記したり、又故らに記述を避けたりした點もあるので、一通り順路を明かにしておかう。江戸を立つたのは十月廿五日であつた。十一月四日尾張鳴海の知足亭に着き、同地に數日滞在中熱田に來往したりして人と俳諧を催した。同日越人と同道して鳴海を立ち、三河の保美に杜國を訪ねて十六日に歸つた。それから廿一日までなほ知足亭にとゞまり、廿一日に熱田の桐葉亭に赴いた。(鳴海に到着後出發までの動靜は、知足の日記によつて詳しく知られる)師走の十日あまりに名古屋を出て郷里に向ひ、貞享五年の正月は伊賀で迎へた。二月には伊勢に赴いたが、そこで三河から出て來た杜國と落ち合ひ、一しよに再び故郷に歸つた。杜國とはさきに保美を訪ねた折、共に吉野の花見に行く事を約束してあつたのである。阿波の庄の新大佛寺を訪ねたり、探丸子の邸で、

さまざまの事思ひ出す櫻かな

とよんだりしたのは、伊勢から歸つて後の事であつた。(紀行は順序が前後して居る)探丸子は前に述べた蟬吟の遺子良長の俳號で、良重の歿後祖父良精の嗣となつて藤堂家をついだのである。紀行には右の句について何の前書もないが、恐らく自分が脱走者の身分である事を憚つて、故らに主家の名をあら

はす事を避けたのであらう。芭蕉は勿論この時藤堂家から表向に出入を許されたのではなく、彼の俳名も漸く高い折から、良重は父の近侍としての懐しさもあり、ひそかにその邸に招いたものと思はれる。蟬吟の歿後すでに二十餘年を経て居る。芭蕉は故主遺愛の櫻に對して、誠にさまざまの感慨に満たされた事であつたらう。さて愈々吉野に立つたのは三月十九日であつた。杜國は萬菊丸と少年らしい名をつけて供をした。この旅は芭蕉の生涯で最も楽しい思出となつたものであらう。『笈の小文』に悲愁の氣が比較的少いのは、杜國と同行の喜びがあつた事も大きな理由だつたと思はれるのである。初瀬、吉野、高野、和歌浦と經めぐつて、奈良に入つたのは丁度灌佛の日であつた。奈良では偶々郷里の故友と會つて、かつ喜びかつ別を惜しんだ。その後の動靜については、『芭蕉翁全傳』所載「翁在京猿雖への返書」によつて詳しく知る事が出来る。即ち奈良から諸所に立寄つて大阪に出、四月十九日尼ヶ崎出船、兵庫に夜泊、須磨・明石の古跡を探り、廿一日は布引の瀧に登つた。さうして廿三日京に入り、廿五日萬菊と連名で猿雖に旅中の狀を報じたのである。こゝで芭蕉は杜國と別れ、近江・美濃を經て尾張に入つた。——杜國は京都に約二ヶ月滞在の後、六月中旬頃伊賀に赴き、猿雖の許に四五日止つて、六月廿五日三河の方へ歸つた。——『笈の小文』は須磨・明石までで終つて居るが、尾張からの歸路越人と共に更科の月を

見た事は、更に稿を別にして筆を執つた。即ち『更科紀行』である。そして芭蕉はそのまゝ越人を伴ひ、八月末江戸に歸つた。

今度の旅での大きな收穫は、いふまでもなく『笈の小文』であつた。それは俳諧文藝として一のすぐれた作品であるばかりでなく、かの名高い冒頭の一節には、芭蕉の風雅に對する根本觀念が、最も明かにかつ力強く表明されて居るのである。そこで芭蕉は自ら俳人として立つに至つた徑路を述べ、次に和歌・連歌・繪畫・茶道等あらゆる藝道を貫く精神が同一たるべき事を喝破し、最後に風雅に於いては即ち造化に隨ひ造化に歸るのを、その根本義とすべき事を示した。(文章參照)芭蕉のこの風雅觀は、要するに俳諧の文藝性を和歌・連歌と同じ文藝精神の上に確立しようとするもので、それは既に天和以來彼が深く思ひを潛めて來た所であつた。それがこゝに至つて完全な自信となつて披瀝され、極めて端的な言葉で表現されたのである。その意味で『笈の小文』は、蕉風の展開史上最も重要な一時期を劃するものと言はねばならぬ。而してこの際芭蕉が俳諧の通俗性について特に言つてないのは、それが常識的に自明の事だつたからである。そのかはりが、彼が力説したのは、造化の自然に歸るべき工夫であつた。即ち芭蕉が俳道修業の第一としたものは、何よりもまづ私意私情を去り、心中の夷狄鳥獸を克服する事であつた。これは恐らく彼が參

禪によつて學んだ所を、そのまゝ俳道の工夫に移さうとした點もあつたであらう。けれども行雲流水の間赤裸々の自然に接して、みづから感悟し得た所が最も多かつたにちがひない。松の事は松にならひ、竹の事は竹にならふ隨順の心を以て對してこそ、始めて萬物はその本來の美を發揮するのである。さうした心境にあつて眺むれば、いかなる通俗卑近な自然と人間の中からも、藝術として最高の美が感得されるであらう。

草臥れて宿かる頃や藤の花

一つ脱いでうしろに負ひぬ衣更

これらの句には、芭蕉が永い旅の生活の間に、おのづから到り得た隨順の心境が見られる。さうしてこゝに見事な俳諧独自の境地が開拓されて居るのである。造化に隨ひ四時を友とするのは、必ずしも旅の上のみ限られた工夫ではないが、旅にあつてはわけて路傍の一木一草にも心はひかれる。すべて物に心が止まつた刹那、それはすでに詩の領域に入り來るのであるが、その間に私意私情が夾まれた場合、眼はその皮相から入つて深く見る事は出來ない。高雅の境は高雅のままに映じて、それはもはや硬化して生命を失つて居るであらう。又卑俗の物は卑俗のまゝにその外形だけが醜く示されるにすぎない。そこから新しい高い詩は決して生れて來ないのである。

芭蕉はだから旅人の心を欲したのであつた。それは一木一草の上にも強く深く注がれる心である。すでに一生を旅人の境涯と觀じた彼は、その思ひを常住に保つ爲に、旅に出で旅に死なうと願ひ、さうしてその間に彼の風雅を完成して行つたのである。

芭蕉は更に第三次の大旅行を思ひ立つた。元祿二年三月初旬、住み馴れた草庵を人に譲つて、杉風の別墅採茶庵に移り、そこで旅の支度などをして居た。これより先荷分の撰になる『曠野』が成つて、芭蕉はこれに序文を書いて送つたが、その中に「糸遊のいとかなる心のはしの有るか無きかにたどりて、姫百合の何にもつかず、雲雀の大空にはなれて、無景のきはまりなき道芝のみちしるべせむと」と言つて居る。彼は今度の旅行に當つても、心を無所着の境に放つて、只管に此の一筋の道を辿らうと思つたのである。草庵を捨てたのは、今度の旅が長期に亘るべきを豫想した故のみではない。やはり無所住無所着の思ひに徹したい爲であつた。曩に芭蕉の猶子といふ桃印の事について述べたが(頁二〇四)、芭蕉はこの旅の前後から、再び身邊に家族的な係累を持つやうになつて居たらしい。少くとも元祿三年芭蕉の留守中に、桃印や壽貞の子次郎兵衛が江戸に居た事は確かな事實である。彼等と芭蕉との關係が何であるかは、結局臆測に任せるより外はないにせよ、その間に何か絶ち難い絆があつた事を我々は感じないで居れるだらうか。すでに

俳人として世間的にも相當認められて居る芭蕉が、もし係累にひかれ安逸を望むならば、家庭生活の保障ぐらゐは容易に得られたであらう。芭蕉にしてもさうした誘惑を少しも感じなかつたとは思はれない。その頃壽貞がどうして居たかは明かでないが、勿論芭蕉の念頭から彼女とその子への心遣ひが去る筈はなかつた。彼は單なる世捨人の如く、たゞ飄々と浮かれ歩く事の出来る身ではなかつたのだ。けれども芭蕉は今やあらゆる誘惑を克服せねばならなかつた。道を求め風雅に生きる爲に、無所住無所着の決意は愈々強く固められねばならない。「古人も多く旅に死せるあり」とは、西行・宗祇の求めた所を求めようとする自分に、今新たに鞭うつ爲の言葉であつた。彼はすでに『野ざらし紀行』の激越な情を超えて、今は平靜な心で旅を迎へるのではあつたが、生還を期しない覺悟に至つては同一であつた。否、旅路の程が遠く險難であり、身の衰へは次第に加はるにつけ、此の度こそ死を思ふ事は更に切實でなければならなかつた。愈々人と別れる時、彼は「前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそゝ」いたのである。けれども止むに止まれぬ旅であつたのだ。そこには人間的な愛執を超えて、永遠の詩に生きようとするものの悲劇があつた。それは道を求むる者の苦闘である。さうしてこの苦闘の中から、芭蕉の偉大な藝術は生れた。同時に彼の運命の悲劇もまた、こゝに深く根ざして居るのである。彼は今や

その宿命を重く負うて、三千里の旅にさまよひ出ねばならなかつた。

愈々江戸を發足したのは三月二十七日の朝であつた。それから同年九月の初め美濃の大垣に入るまで、日數百五十日、旅程六百里に及ぶ大旅行のさまは、紀行『奥の細道』に詳しく記されてある。勿論紀行の本文は後に成つたのであるから、旅程の順序の如きは必ずしも旅行の實際に合致して居ない點もあらう。しかしこの旅が芭蕉の藝術をいかに大きく育てたかは、『奥の細道』が最もよく實證して居るのである。その本文は全部「本文篇」に掲げてあるから、讀者は自らこれによつて芭蕉の足跡を辿る事が出来るであらう。さうしてかの『笈の小文』に述べられた風雅の理念が、いかに深められ又實踐されて行つたかを見るがよい。芭蕉は道すがら數を盡す風光に魂を悩まし情を勞したが、彼の烈しい感傷の涙はたゞ徒らに悲寥哀愁の氣を訴へるものではなかつた。その感傷の底にはいつも温かい慈愛が籠つて居た。かの市振の驛で遊女から同伴を乞はれて、「不便の事には侍れども、我々は所々にてとゞまる方多し。只人の行くに任せて行くべし。神明の加護必ず恙なかるべし」と言捨て出でつゝ、あはれさ暫くやまざりけらし」と言つた芭蕉の言葉には、冷厳な運命の支配を歎きながらも、靜かにこれに隨順する心の安らかさが見られるではないか。言はゞそれは和らかな慈光を浴びた感傷の姿である。芭蕉が求めたわびとさびとの世界

は、このやうな自然に随順し安住するものに、初めて見出されるであらう。そこでは人間の感傷は慈愛になごめられ、すべての苦惱は枯淡閑寂の静けさと和らかさとの中に融け去つてしまふ。芭蕉俳諧の最も重要な理念とされるさびは、要するに單なるをかしみやあはれを、この自然に随順した枯淡の境地にまで止揚する所にあると言つてよからう。奥の細道の長い旅の間に、芭蕉はひたすら思ひをこゝに潛めて、その工夫に怠らなかつたのであつた。『去來抄』によれば、芭蕉が初めて不易・流行の教を説いたのは、この旅行を終へた冬の事であるといひ、更に翌元祿三年から撰ばれた『猿蓑』に、寂・栞・細みの俳諧がその完成した姿で示されて居る事を思へば、蕉風の展開の上に奥の細道の旅がいかなる意味をもつかは、おのづから明かであらう。

芭蕉は大垣の如行亭に暫く足をとゞめたが、旅の勞れもまだ休まらないのに、九月六日伊勢の遷宮を拜みに出かけた。それから故郷の伊賀に立寄り、京都・湖南の門人を訪ね、湖水のほとりに元祿三年の春を迎へた。二月には又伊賀・伊勢に赴いたが、三月再び湖南に歸り、四月から石山の奥なる幻住庵に入つた。こゝでかの「幻住庵の記」が草されたのである。又この間に珍碩・曲水と三吟した花見の一卷を始め、路通・乙州・昌房・正秀等の興行した歌仙五巻を集めた『ひさご』が成つた。分量から言へば七部集中最小の集であるが、その實質は『猿蓑』と共に蕉風の

圓熟期を代表するものと言はれる。こゝに門人たちは芭蕉が旅の間に工夫し得た所によつて、最初の鉗鎚を受けたわけであるが、一座した人とは湖南の門人に限られ、なほその代表的價値は『猿蓑』に遙かに及ばない。さて芭蕉は中秋名月の頃幻住庵を下つて木曾塚の草庵に入り、堅田に旅寝したり、京都に出たりして年を暮し、元祿四年の春もまた湖南で迎へた。この年四月十八日嵯峨に遊んで去來の別墅落柿舎に至り、そのまゝ五月四日まで滞在した。その間の日記が「嵯峨日記」である。——本文篇には頁數の都合上その後半を略した。——かうして湖南と京都とを來往して居る間に、前年から去來・凡兆の二人によつて進められて居た『猿蓑』撰集の業は、漸く體裁を整へるに至つた。芭蕉がこの撰集に對して、十分の熱意を以て助力監修した事は言ふまでもない。句を取捨するに當つて、師弟がいかに精選を期したかは、『去來抄』や『旅寝論』等によつて知られる。かくて元祿四年七月三日（俳諧書目録による）、『猿蓑』は愈々出版される事になつた。

『猿蓑』が蕉門の撰集に占める地位については、特に論ずるまでもない。體裁の完備、内容の充實、共に相俟つて正に蕉風俳諧の圓熟期を代表すべきものであつた。門人たちは或はこれを俳諧の古今集であると稱し、或はこゝに至つて全く花實を備へたと評して、その風調を最も重んじたのである。もとより芭蕉の俳諧は『猿蓑』に止まつて終つたのでなく、更に『炭俵』の輕みに

轉じたのであるが、それは所謂流行の新しいに向つて絶えず誠をせめた姿に外ならないので、不易の體は『猿蓑』に於いて眞に確立されたと言つて宜い。即ち寂・栞・細みを旨とする芭蕉の俳諧は、こゝに至つてその大成を見たのである。大成は發句・連句に通じての事であるが、特に注意すべきは連句に於いて、句附がその最大特質として完成された事である。從來の連句が専ら知的な連想による物附——前句の中のある言葉の縁をたよつて附けるので、例へば前句に「小倉の花」とあれば「色紙」（小倉の色紙といふ縁による。）と付け、「頭にさせる」とあれば「二月の雪」（和漢朗詠集の句「折梅花而挿頭、二月之雪落衣」による。）と付ける類である。——か、前句全體の意味を受けて、これに相應した意味の句を附ける心附かに限られて居たのに對して、芭蕉は新たにうつり・響・句・位を以て附ける事を教へた。これらの言葉は色々に變つて居るが、それは要するに前句の情趣風韻を主體として、これに應ずべき句を附ける事である。即ち一句全體のほひを中心とした附方である。又言葉をかへて説明するならば、前句と附句との關係は、共に同じ情趣の象徴として連つて居るのである。さうしてその象徴的な美の調和が、蕉風連句の最もすぐれた特質とすべきものであつた。こゝに物附や心附の調和よりも、更に高次な幽玄美が味ははれるであらう。たゞし今は句附を説くのが主眼でないから、その實際は本文篇に掲げた

『猿蓑』中の一巻によつて知られたいが、芭蕉がかうした附方の工夫を完成したのは、やはり奥の細道の旅の間であつた事を注意せねばならぬ。勿論句附は『冬の日』時代から、すでに實際の作には見られた。けれどもそれを理論として明かに説き示したのはなほ後の事である。加賀山中の温泉で曾良・北枝と共に三吟の歌仙を試みた評語（天保十年刊『山中集』に收めてある）によれば、芭蕉はこゝにうつりについて教へて居る。うつりとは句の情趣から情趣への自然の移りを意味するもので、同時に二句の間の情趣が互に相映發する義とも解されるのである。言ふまでもなくそれは句附の教に外ならない。寂栞といひ、不易流行といひ、うつり・句といひ、いづれも蕉風俳諧の最も重要な理念が、『猿蓑』の時代に於いて明かな自覺を得るに至つたと見られる事は、やはり芭蕉の旅の賜と言はねばならないであらう。

芭蕉は落柿舎を出てからも、京都と湖南の間を來往し、仲秋の頃は湖上に三夜の月を賞したりしたが、十月江戸に歸る事になつた。途中、近江平田の明照寺に宿り、三河新城の白雪亭に立寄りなどして、愈々江戸に着いたのは十一月の朔日であつた。三年ぶりの歸東である。芭蕉庵は出發の折に人に譲つてしまつたので、橋町に一時の假寓を求めてこゝに落ちつく事になつた。舊友門人などは日々に草扉を訪れて、再會を喜び旅の勞れを犒つた。幻の巷に涙を濺いでさまよひ出

てから、旅路の露とも消えないで再び歸つて來た事を思へば、誠に夢のやうな氣がした事であらう。

ともかくもならでや雪の枯尾花

と、芭蕉はその感懷を一句に洩らした。さうしてこの假寓に冬籠りをしたまふ、元祿四年を送り元祿五年を迎へた。

七、閉 關

橘町の假寓に元祿五年の春を迎へた芭蕉は、歳旦の吟に

人も見ぬ春や鏡の裏の梅

と詠じた。鏡裏は即ち世塵の外之地である。そこに人にも知られず咲く梅の花をあはれんだ彼は、我が風雅の孤高を歎じながら、ひとり梅花の清香を保たうとする情を寄せたのである。思ふに三年ぶりで江戸に歸つて見ると、江戸俳壇の狀勢は芭蕉の意に満たぬものが多かつたのではあるまいか。彼のわびやさびの俳諧は、必ずしも門人たちに喜び迎へられない事を知つたのである。元來彼は旅を栖とし旅に終る所願で、深川の草庵を破りすてたのであつた。けれども彼は生きて再び江戸に歸らねばならなかつた。それは恐らく彼の家族的係累の止むなき事情からであつたらう。桃印はすでにこの頃病んで居たと思はれるし、壽貞もまた健康ではなかつた。それらの人を芭蕉はやはり自ら世話しなければならなかつたのである。詩人芭蕉はすでに自然への隨順に住の境地を見出して居たけれども、現實に於ける人間としての苦惱は、なほ生きる限り負つて行

かねばならない。しかし今かうして市中に入り都人と交るに至つて、彼は果して高く藝道の操守を持ち、ひとり清閑を全うする事が出来るであらうか。當時彼の心には烈しい自省が行はれて居た事を思はせるのである。さうしてその自省が、やがてかの歳旦の一句ともなつたのであつた。

芭蕉はもとより好んで人を絶つ意はなかつたであらう。けれども人と交つて所詮我が風雅に益のない事を知つた彼は、人も見ぬ鏡裏の梅に自分の姿を見出す外はなかつた。人を厭ひ世と遠ざからうとする情は、次第に彼の心に加はつて行つた。旅を戀ひ旅に死なうといふ思ひは、今更に募るばかりであつたにちがひない。しかも世間的の羈束からはどうしても遁れられない人間であるのだ。たゞ一筋の風雅に生きようとする熱情は、遂に彼を烈しい焦慮の中に追ひ込んだ。遂にはこの風雅さへも胸中を騒がす魔障と觀じ、ある時は又すべてを放下して栖を去らうとまで思つた。

こゝかしこ浮れありきて、橋町といふところに冬籠りして、睦月・如月（すまき）になりぬ。風雅もよしやこれまでにして口を閉ぢむとすれば、風情胸中をさそひて物のちらめくや風雅の魔心なるべし。なほ放下して栖を去り、腰にたゞ百錢を蓄へて挂杖（しめじやう）一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情終に菰をかぶらんとは。（栖去之辨）

といふのは、即ち當時の彼の感懐であつた。けれども結局彼は栖を去り菰を被る事は出来なかつた。この間に杉風・枳風・曾良・岱水等の門人たちによつて、新しく芭蕉庵の再興が企てられたのである。そして場所も舊庵のほとり近く、「三間の茅屋つきくしう、杉の柱いと清げに削りなし、竹の枝折戸安らかに葭垣厚くし渡し」た新庵は、五月半ば頃造築が成つた。流石に芭蕉も人の志を喜ばずには居られなかつた。陸奥の行脚を思ひ立つた時、舊庵の軒端に愛した芭蕉だけは、隣地に移し植ゑて人々にその世話を頼んであつたのだが、三年の春秋を過してその葉は舊に變らず榮えて居た。今池に臨み江に近く、月を見るのに便りよい新居に入つて、まづ名月の装ひにとその芭蕉を庭に移し植ゑたので、庵は再び芭蕉庵と呼ばれるにふさはしい實を備へた。（文章篇を移す詞）かうして芭蕉も暫くは庵主としてこゝに落ちつき、旅の思ひからも遠ざかつた事であつたらう。

新庵の清興は素堂との唱和に始まつた。素堂の葛飾の庵は程近かつたので、屢々こゝに訪ひよつたのである。文月の初め頃から主客の二人が月を待たさまは、素堂の「芭蕉庵三日月日記」（三日月日記）に詳しく記されてある。芭蕉は「月に二人隠者の市をなさん」と言つて、入り来る人毎に句をすゝめて三日月から名月までの句を集めた。納涼の頃から素堂と折々に言ひついで居た和

漢一卷も、月の前に満尾するに至つた。かうして芭蕉は新庵に入つて以來、只管清閑を楽しむかの如く見えたが、歳旦の吟に鏡裏の梅をあはれみ、栖去の辨に風雅をも放下しようとした念は、なほ彼の心から去りはしなかつた。しかしすでに家族的係累の羈絆から脱せられない彼である。[壽貞・桃印・まさ・おふう等は、芭蕉が新庵に入ると共に、恐らく同居するに至つたものと思はれる。それらの人々を一方に扶養しながら、客を迎へ句を語る事は、芭蕉にとつてはむしろ苦痛であつたにちがひない。のみならず客は必ずしも清閑を楽しむ人ではない。利害を破却し老若を忘れるよりは、煩惱増長して是非を争ふに終る事が多い。所詮「人來れば無用の辯有り、出でては他の家業を妨ぐるも憂し」である。山野に跡をかくす事が出来ないとなれば、今はたゞ市隱としてその操守を持する外はない。「栖去の辨」を作るかはりに、今度は

朝顔や晝は鎖おろす門の垣

と吟じて、遂に門を閉ぢ人を謝するに至つた。(文章篇「閉關」當時「薦獅子集」には右の朝顔の句を之説参照)當時『薦獅子集』には右の朝顔の句を録して、「深川いづれの庵主とかや、此の句を得て他にかたくあはずと、旅僧の語り捨てて通る」とあるから、「閉關之説」は徒らに文章の作に終つたものではなかつた。芭蕉は實に友なきを友として、孫敬・杜五郎が志を行ふ意があつたのである。

芭蕉はかつて自らの系譜を、西行に宗祇に雪舟に利休に求めた。それはもとより彼の風雅へ流れる傳統の精神を意味するものであるが、同時にまた人間芭蕉の風格を規定すべき血統でもあつた。漂泊の歌人、行脚の連歌人、わびの茶人、それらが持つ人間的なものは、芭蕉に於いてもまた同じやうに見出されねばならぬ。而して彼等に共通な人間は何であつたか。それは塵俗と絶つて物外に遊ぶ隱士の姿である。そこには修道者と同じ嚴しい意志が見られるけれども、この意志は飽くまで自分の心から卑俗を追ふ鞭より外のものではなかつた。他人に對し、世間に對して、實用的積極的にはたつきかける意志ではない。だから俗念を去つて後に残るものは、たゞ悠遊自適の天地である。芭蕉にあつてこの自適の人間は、雪の袋を投頭巾とし、瓢一つに輕き我が世を觀じて、たゞに貧閑を楽しむ生活の中に描き出された。更にまた一爐の備へさへ煩はしいとして、行雲流水の間に身をはふらかさうとしたのである。けれども芭蕉は遂に山居獨住の人ではなかつた。彼の長い旅の生活も、全く人と絶つて孤雲の外に來往したのではない。却つてその間友と會し人と交る機會は多かつたのである。元來我が古來の文藝人に於ける隱者的な生活態度は、言ふまでもなく佛教思想に根ざす所が最も多いので、事實また長明や西行は半ば僧侶として見らるべき生活を送つて居る。随つて彼等の文藝が現實否定的な方向をとるべき事も、當然に豫想されね

ばならぬ。けれども長明にせよ、西行にせよ、又心敬にせよ、宗祇にせよ、彼等は世外に隠遁しながら、しかも最も人間に還る事を欲して居たのであつた。「寂しさに堪へたる人のまたもあれな庵ならむ冬の山里」といふのは、西行の厭世なり悟道なりが不徹底であつた事を示すといふよりは、そこに我が隠者的文藝人の傳統的な姿が端的に現はれて居る事を思はねばならぬ。彼等の現實否定は決して懷疑や虚無に終る事はなかつた。彼等が現實に對して抱いた感傷は、やがて現實を出て安住の世界を求むべき事を彼等に迫つたのであるが、——さうしてその爲に一度は人を厭ひ世を捨てたのではあるが、白雲搖曳の天地に入つてそのまゝ跡をかくしてしまつたのではない。彼等はそこから再び人間の世界に還らずには居れなかつたのである。しかしそれは宗教家の如く人間を救はうとする爲ではない。寂しさに堪へた世界に人間を迎へようとするのである。彼等の文藝は高踏的でありながら、しかも遂に大衆から全く離れ去るものではなかつた。さうした態度に、我々は日本文藝の大きな一の傳統を見ると言へないであらうか。

「閉關之説」を作つて市に隠れた芭蕉の姿は、即ち西行・宗祇からの人間的系譜の中に當然見らるべきものであつたらう。同時に隠れて隠れ得られない傳統も、また彼の人間の中には生きて居た。否芭蕉にあつてこの傳統は、西行よりも宗祇よりも更に擴充された形で現はれたのであつ

た。元來芭蕉の俳諧は所謂連俳直一の道にあつて、しかも俳諧独自の通俗性に立つ所に大成されて居る。言はゞそれはわびとさびの世界に迎へられた現實であり、又俗中に在つて俗を去つた境地である。芭蕉が清閑を保たうとする烈しい自省から、一時門を閉ぢ人を謝するに至つたとしても、市隱としての芭蕉の本然の姿は、さうした生活に於いて正しく示される筈はなかつた。芭蕉は勿論全く友を絶つ事は出来なかつたのである。薺の垣に晝の鎖をおろしてから間もなく、その年九月には折から東下した酒堂を迎へて、嵐蘭・借水等と共に深川夜遊の四吟歌仙を催した。その夜の芭蕉の發句は、

青くてもあるべきものを唐辛子

であつた。この句意はいかやうにも聞かれるであらう。けれども嚮に鏡裏の梅を憐れみ、又「風雅もよしやこれまでにして口を閉ぢむ」と言ひ、遂に「閉關之説」を作つて堅く人に會はなかつた後に、門を開き友を迎へてこの句があつた事を思へば、芭蕉の眞情はこゝにほど探られるのであるまいか。即ち芭蕉は唐辛子の青いまゝに、葉陰に隠れて終るべき事を願ひながらも、やはり赤く色に出ずには居れない自然を、自分の姿として眺めたのである。風雅の魔心と自ら言つたものは、實は芭蕉にとつて止むに止まれぬ自然の心の催しであつた。この句をさうした意に聞く

事は、あなたがち牽強ではないであらう。

酒堂は元祿五年九月に芭蕉を訪ねてから、翌年二月まで庵の客となつて居た。その間人々の出入はかなり多く、又酒堂と相前後して彦根の許六も江戸に在り、芭蕉庵と許六の旅亭との間の來往も繁かつた。今やかの「閉關之說」は、全く有名無實となり終つた觀があつた。しかしそれは彼が世俗を拒む事が出來ないで、たやすく操守を屈した故ではない。唐辛子が遂に青いまゝで居れなくなつた時、芭蕉が俗中にあつて俗を去るの工夫は、一段の進境を遂げて居たのである。即ち所謂輕みへの新しい展開であつた。『猿蓑』が蕉風の圓熟期を代表するものとすれば、『深川集』や『炭俵』はそれが更に輕みに轉じたものと言はれる。だがこの輕みは輕妙・輕快といふ如き、一通りの淺い意味で解さるべきものではなかつた。芭蕉は自ら晩年の俳風について、「今思ふ體は淺き砂川を見るがごとく、句の形・附心ともに輕きなり。其の所に至りて意あり」(別座)と語つたといふ。更にこの意を明かに説明したのは、去來が出羽の不玉に答へた論書(拙著『俳諧史論考』所載「去來の遺著」の中に紹介した)である。去來は不玉が一偏に輕きを好むのを批難したのに對し、「當時の教へ輕を專にするは、往時の重を破らんが爲なり。輕にあらすんばいかで往時の重きを破らんや」と駁し、輕と重との意義、輕と薄との相違等について詳しく論じて居るが、なほ芭蕉が輕みを教へた言葉を次のやうにあげて居る。

やうにあげて居る。

去來曰、平日翁にきける言千萬言、しかも皆事につき時に應ずるの示にして、今筆頭に書しがたし。たゞ輕みを用ふるの教へ、一兩言を書て送之。翁曰、當時の俳諧は梨子地の器に高時繪したる如し。美盡し善盡すといへども漸く飽之。我が門人の句は桐の器をかき合せて塗りたらんが如く、ざんぐりと洗ひて作すべし。

即ち輕みは重く停滯した俳風を、輕やかに疏通せしめるの謂ひで、それは要するに俳風を一新すべき變に外ならない。而して今芭蕉の教へに於ける場合、この變は又俳諧の通俗性に對する自覺の強化を促したものと見ねばならなかつた。

『冬の日』から『猿蓑』へと歩いて來た跡を顧みた時、俳諧美の本質は既に正しく把握し得たとは言へ、さび・しをりの句境へのひたすらな芭蕉の歩みは、偶々和歌連歌に對すべき俳諧獨自の通俗性を見失はせる虞れを多分に伴つて居た。不斷の工夫と修練に怠る人々は、いつの間にかたゞ幽玄閑寂や高雅優麗な形のみ捉はれて、しかも芭蕉の心から遠く距つて行く事に氣づかなかつた。彼等は梨子地の器に高時繪をした美しさに目が移ると、もはやそこに止まつて動かうとしなかつたのである。だがそこに止まることは、やがて俳諧の生命を内部から破壊する結果に終

るであらう。何となればさうした梨子地の高時繪は、むしろ和歌的・連歌的の美しさである。その模様や色合に一時俳諧の新しみを求め得ても、それだけでは結局行きづまつてしまふ外はないのである。この場合さうした停滞を打破すべき方法は、何よりも特に庶民的通俗的な素材に於ける美を、深く追求する所に見出されねばならぬ。而して『炭俵』時代の輕み^{かろみ}が、このやうな停滞の打破を志して居たとすれば、桐の器の比喻は誠に適切な教と言ふべきであつた。だがそれは輕みとして特に説かるべき事ではなく、實は元來俳諧美の本質がそこに在つたのである。芭蕉はもとよりそれを忘れて居たのではない。芭蕉が誠を勤めると言つたのは、心を自然に隨順せしむべき不斷の努力をさすと共に、俳諧に於ける通俗性を擴充する爲の絶えざる工夫をも意味するものでなければならなかつた。しかるに『猿蓑』時代までの芭蕉は、先づさびの世界を求める事に急で、通俗卑近の素材からは却つて遠ざかる傾さへあつたのである。芭蕉俳諧の成長から言つて、それは當然經べき順路であつた。單なる通俗性の擴充は、再び談林の卑俗に復るだけであつたのだから。しかしすでに一度さびの世界を體得した後も、芭蕉はなほあまりに世俗に——さうして現實に對して、臆病になりすぎて居はしなかつたか。彼が西鶴を「あさましく下れる姿」と評したのは、彼の武士的教養があつた露骨な現實描寫を容れ得なかつた點もあつたらう。又所詮芭蕉は

感傷の詩人でもあつた。けれども西鶴の小説も芭蕉の俳諧も、時代の通俗性と自由性との文藝的深化と解されるかぎり、彼等が文藝の上に成し遂げた所は、結局同じ意味を持つべきものであつた。芭蕉が鏡裏の梅に寄せて我が風雅の孤高を歎じた時、同時に彼はまた俳諧の通俗性について深く省みねばならなかつたにちがひない。果して彼は「栖去の辯」を草し「閉關之説」を作りながらも、世俗から全く逃避し敗退するかはりに、俗中に在つて俗を去るべき一段の工夫を遂げたのである。それが即ち輕み^{かろみ}であつた。

輕みの意味がこのやうに解さるべきものとすれば、それは俳諧独自の通俗性に即しつゝ、新しい美の探求に向つて『猿蓑』から百尺竿頭一步を進めたものであつた。こゝにさびの藝道に於ける行詰りは打開されると共に、それだけ美を求める心は更に深い沈潛を要するであらう。去來も「桐の器をかき合せて塗らんは、細工も塗師もなほ手綺麗ならずんば見苦しかるべし」(答不玉論書)と注意を加へたのみならず、又「只輕の輕たるを知らずして、漫りにこれを好まば卑薄に落ちん」(同上)とすでに此の時警告を與へて居る。畢竟輕みは「高く心を悟りて俗に歸るべし」(三冊子)といふ教に基くものでなければならなかつた。芭蕉の閉關は實にこの高悟歸俗の一工夫への到達を前に、世俗と風雅との對立を破る爲の烈しい内省と自虐であつたのだ。さうして遂に

彼は、

金屏の松の古さよ冬籠(炭俵)

の一句に、わびやさびが対象の世界にあるのではなくて、人間の内部からの投影である事をはつきり示してくれたのである。「炭俵」を撰んだ野坡や孤屋は商賈の徒であるが、芭蕉は彼等との交はりには於いて、軽みの風雅によつて市隱の操守を厳しく保つて居る。しかもその厳しい操守の爲に、少しも俳諧の自在を失ふ事はなかつた。芭蕉の胸中にある悠遊自適の天地は、今何物にも妨げられない空濶さを持つて居た。かつて『貝おほひ』に鋭い才氣を示した芭蕉、談林の卑俗を脱する爲に戦つた芭蕉、草庵にわびを樂しんだ芭蕉、無所住の思ひをなして旅にさまよつた芭蕉、その間ひたすらにさびを求めてやまなかつた芭蕉、さうした芭蕉を顧みたま時、最後に到達した輕みの境地まで、彼がいかに骨を刻むやうな精進をつゞけたかが思はれるであらう。それは藝道を大成するものの最も正しい歩みであつた。さうして彼は遂に「予が風雅は夏爐冬扇のごとし、衆にさかひて用ふる所なし」(「柴門の辭」「柴門の辭」文章篇参照)と、藝道の絶對地を看破つたのである。芭蕉が五十年の修業は、實にこの一語を何の疑ひもなく言放ち得る所に盡きたと言つて宜い。こゝにさびを守るべき操持の厳しさは、無爲の安らかさにまで止揚され、芭蕉の人間は市隱としての完き姿を得た。

詩人芭蕉はすでに高悟歸俗の心境に、俳諧の無爲と自在とを體得したけれども、人間として世に住む爲の悩みから免れる事は出来なかつた。元祿六年春には桃印が病死し、引續いて壽貞も病辱にあつた。桃印の病中神魂を悩ませた芭蕉は、死後斷腸の思ひは益々止み難く、花の盛り春の行方も夢のやうに暮らして、句作の興さへ起らなかつたのであつた。(「刑口宛手紙」「刑口宛手紙」)當時人に送つた手紙の中に、彼は「誠隱閑菴の中まで世の有様のがれがたく、是非なき事に胸を痛ましめ罷在候」(三月十二日附)三月十二日附と述懐して居る。かうして春の間は殆ど句さへなく過したが、四月末には江戸滞在中の許六が歸郷する由を聞き、「柴門の辭」を作つて餞とした。かの風雅を夏爐冬扇に比したの、即ちこの送別の辭中に語られた言葉で、芭蕉が人の世の悲しみと悩みの中にあつて、しかも風雅の一道に徹した姿はこゝに雄々しくも仰がれる。十月初めには素堂亭の殘菊の宴に列なり、蛭子講の頃は野坡・孤屋・利牛等と一卷の歌仙を催した。この頃から『炭俵』撰集の事は漸く運ばれ、翌年六月に至つて上下二卷の完成を見た。これが芭蕉晩年の輕みを代表すべき集である事は言ふまでもない。芭蕉の閉關は決して現實からの逃避でなく、こゝにその正當な結末を示したのである。

八、終の旅

芭蕉は草庵に止まる事すでに三年、その間幾度か旅心は動いたであらうけれども、桃印の死、壽貞の病などに是非なき月日を送らねばならなかつた。元祿七年の春を迎へた頃、壽貞も些か小康を得たのであつたらうか、芭蕉の遊意はやゝ具體化して來た。同年正月廿日附で郷里の意專に宛てた手紙の中に、「又と東麓庵の櫻の頃はと漸と旅心も浮かれ初め候。されども未だしかと心も定まらず候へ共」と言送つた。しかしなほ春の間はさり難い事どもが多かつたのか、愈々旅行が實現されるやうになつたのは夏の頃であつた。桃隣の『陸奥千鳥』によれば、「然れども老いたるこのかみを心もとなく思はれけむ、故郷ゆかしく又戊五月八日此の度は西國に渡り、長崎にしはし足をとめて唐土舟の往來を見つ、聞馴れぬ人の詞も聞かんなど、遠き末をちかひ首途せられけるを」とあり、即ち今度の旅は故郷の老兄の見舞をかねて、遠く筑紫の果までも見きはめようといふのであつた。もとより長い旅路の事である。身を野ざらしの覺悟は、いつとても芭蕉の心から離れる事はなかつたらうが、留守の庵には病中の壽貞を残して居るのである。流石にこの度ば

かりは、彼も命ながらへてとの望みをもつて出で立つた事であらう。しかもその望みはすべて空しく終り、やがてこれが芭蕉の最後の旅となつたのであつた。

江戸を立つたのは五月八日であつた。人とは品川まで見送つて名残を惜み、芭蕉は

麥の穂を力につかむ別れかな

の句を扇に書いて人々に残した。途中島田の塚本氏に宿して五月雨の吟があり、尾張では荷分・野水・露川等の門人等と會して唱和し、佐屋の泊りに水鶏を聞いたりして、廿八日に故郷伊賀に着いた。そして翌月の閏五月十六日迄こゝに滞在し、それから京都・湖南に遊んで、去來・文章等を始め門人たちと風交を重ねた。(道中並に伊賀着後の動靜については、五月十一日附書)當時嵐山・清瀧等での吟行の句や、人々と唱和した作については、今一と記す事を略するが、中でも閏五月下旬落柿舎での數回の集まりや、六月廿一日大津の木節庵で、

秋近き心の寄るや四疊半

を發句として、木節・惟然・支考等と催した一會などには、芭蕉も心ゆくばかりの雅興を覺えた事であつたらう。だがこの間に芭蕉は留守宅からの悲しい便りを手にせねばならなかつた。それは壽貞の訃報である。彼女の歿したのは、伊賀上野念佛寺の過去帳によれば、六月二日の事であ

つたと思はれるが、芭蕉がそれを知つたのは六月八日頃であつたらしい。同日附猪兵衛に宛てた手紙の中に、芭蕉は「壽貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合とかく難申盡候。(中略)何事も〳〵夢まぼろしの世界、一言理窟は無之候」と、たゞ浮世のはかなさを歎いて居る。しかもこの言葉少い歎きの中に、いかばかりの悲しみが籠つて居た事であらうか。あとに残つたまさ・おふう二兒の身の上も、さまざまに氣遣はれた事であらう。芭蕉は今度の旅には、壽貞の子次郎兵衛を同伴して居た。六月廿四日附杉風宛芭蕉の手紙には、この次郎兵衛を江戸に下す由の事を記してあるが、恐らく母の新靈を祭らせようといふつもりでもあつたのだらう。しかし芭蕉はそれも道中却つて心もとなく思つた爲か、次郎兵衛はそのまゝ旅中を伴ふ事にした。(右の杉風宛手紙によれば、次郎兵衛が江戸に歸るのには支考と惟然とが同道する由を記してある。然るにこの兩人が同道し難い事情等があり、次郎兵衛の東歸も中止されたのかも知れない。)今や生きて歸らうとの望みもあだに思はれるのみで、秋が近づくと共に芭蕉の悲しみは愈々深かつたにちがひない。

七月には郷里の兄からも便りがあつたので伊賀に歸つた。一家の盆會を營む爲であつたが、芭蕉は又

數ならぬ身とな思ひそ魂祭

と、壽貞の冥福を一人ひそかに祈つた。その頃兄半左衛門は芭蕉の爲に、自宅の後園に無名庵を新しく建ててくれたので、芭蕉は新庵に門人の誰彼を招いて月見の宴を催したり、京から惟然、伊勢から支考を迎へたりして、二月程をこゝに暮した。それからかねて難波の之道・酒堂等と約があつたので、九月八日伊賀を立つて大阪に向つた。次郎兵衛の外に支考と惟然が同行した。その日は奈良に一泊して、菊の香や夜の鹿などの吟があり、九日の夕方大阪に着いて酒堂の許に旅装を解いた。翌十日の曉から少し寒氣がして、その後何となく気分はすぐれなかつたが、あちこちの俳席に招かれて寧日なく過した。(當時の事はなほ『箋日記』等に詳しい。)だがこの間芭蕉は多くの門人たちに圍まれながらも、ひし〳〵と迫つて來る孤獨の思ひをどうする事も出来なかつた。

此の道や行く人なしに秋の暮

の吟に、「所思」と題した芭蕉の意中を察すれば、難波に於いても彼の道の行はれ難い事を思つたのではあるまいか。江戸の門人中かつては桃櫻と誇つた其角・嵐雪も、今は彼の意に満たぬ事が多かつた。(この事は當時杉風・桃隣等から旅中の芭蕉に宛てた手紙によつても十分察せられるが、今その引用を略する。)去來・丈艸の徒はもとよりあくまで彼に忠實であつたが、さうした眞に彼と同じ道を行かうとするものは、誠に寥々たるものである。彼は自ら完成した輕みの風を、旅中門人たちにも説いたのであるが、それを正しく理解してくれるものは、果してどれくらゐあるであらうかと思へば、實に「此の道や行く人なし」の歎に堪へなかつ

たのであらう。そして

この秋は何で年よる雲に鳥

と、その淋しい旅懷を孤雲飛鳥に託した。

九月二十九日の夜から泄痢のいたはりがあつて、十月二日、三日の頃から病勢やゝ募るに至つた。その頃芭蕉は之道の亭に泊つて居たらしいが、病勢の増進と共に見舞の人々も多く、何かと不便の點もあつたのであらう。十月五日の朝南の御堂の前の靜かな所に病床を移した。それは花屋仁右衛門が裏の貸座敷であつたといふ。そして病床に附添つてゐた支考たちは、湖南・伊勢・尾張等の親しい人々に師の病を報じた。七日には去來・丈艸・乙州・木節・正秀・李由等の門人が馳せ集まつて、各々看病に誠を盡した。八日の夜深更に及んで、芭蕉は急に硯に墨を摺らせ

て、
旅に病んで夢は枯野を駆けめぐる

の一句を示した。句には「病中吟」と題してあつた。芭蕉はなほ「枯野をめぐる夢心」とも、「なほかけめぐる夢心」とも案じて、いづれが宜からうと門人に相談しながら、「これさへ妄執ながら、風雅の上に死なん身の道を切に思ふなり」と言つて、臨終の折までも絶ち難い風雅への執着

を自ら悔んだ。そして「この後はたゞ生前の俳諧を忘れんとのみ思ふは」と、返す／＼語つたが、遂にこの一句が生涯のかたみとなつたのである。思へば蟬吟の傍らにあつて、始めて古風の俳諧を口ずさんで以來、いかばかり芭蕉の身をせめ情を勞せしめた風雅の道であつたらう。名利の思ひを捨て、世俗の汚れに染まず、たゞ無能無才の故と觀じて繋がつたこの一筋も、更に高い出離の道から見れば、やはり妄執の一であつた。だから嘗ては「風雅もよしやこれまでにして口を閉ぢん」とまで思ひ定めたのであつたが、所詮風雅を離れては生きられない自分である事を芭蕉は知つて居たのだ。この妄執と共に一生を終る事は、むしろ彼の願ひであつた。今旅に病んで死に對した時、もとより思ひは肉親故舊の上にとゞまらずには居れなかつたであらう。けれども壽貞はすでに此の世にはなかつた。壽貞の訃を聞いて以來、芭蕉には死を急ぐ心さへあつたのではな

いかと思はれるのである。まさ・おふう・次郎兵衛、さては兄半左衛門等の身を思ひやつて、流石に悲しみは胸に満ちたであらうが、その悲しみに對する覺悟は、芭蕉にはもう十分出來て居たのであつた。自ら筆を執つて兄に認めた遺書にも、「御先に立ち候段殘念に可被思召候。如何様とも又右衛門(註、菊山氏の調査によれば半左衛門の弟、芭蕉の兄に當る)便りに被成、御年被寄御心靜に御臨終可被成候。こゝに至り申上る事無御座候」と、死に臨んで安らかに落ちついた心境が示されて居るのである。

しかもなほその間夢裡にも去來するものは、實に枯野をかけめぐる風雅の一念であつた。芭蕉の精神はかうして遂に風雅の中に生き通したのである。

十日の暮から芭蕉の病状は革つた。人とは驚いてひそかに後の準備にも心を配らねばならなかつた。芭蕉も再び起ち難いのを知つたのであらう。支考を呼んで遺書數通を認めさせ、又兄に宛てた一通は病苦の中から自分で筆を執つた。さうして人々に残して置く形見の品まで、それ／＼に書き記させた。今はもう安らかな臨終を待つばかりである。十一日には折から旅行中の其角が來合せて、はからず最後の伽に加はり得た契りの程を喜んだ。この日の朝から芭蕉は全く飲食をとらなかつた。十二日の正午頃、目のさめたやうにあたりを見廻したので、傍らの人はさし心得て粥をすゝめると、僅かに唇を濡らしたただけであつた。その日は小春の陽ざしが暖かだつたので、白い障子に蠅が何匹も這ひ廻つて居る。それが目ざはりなので、誰が工夫したのであらう、竹の先に糶を塗つたのを持ち出して、蠅をさして歩く。それにさへ上手と下手とがあるのである。芭蕉はその上手下手を見てをかしがつた。今死ぬ人とは思へない安らかさであつた。だがそのまゝもう芭蕉は物を言はなかつた。申の刻ばかりに死顔うるはしく、永久の睡りについたのである。時に五十一歳。かうして芭蕉の一生は靜かに終つた。

芭蕉の臨終前後のさまについては、支考の『笈日記』や其角の『枯尾華』に詳しく記されて居る。遺骸は十二日の夜川舟に乗せて、其角・去來・乙州・丈艸・支考・惟然・正秀・木節・吞舟・壽貞の子次郎兵衛の十人が附添ひ、翌朝伏見に着いた。それから粟津木會塚の舊草に移し、十四日に義仲寺の直愚上人を導師として葬送の事を營んだのである。淨衣その外は智月尼と乙州の妻が裁ち縫うて遺骸に着せた。その日招かざるに會葬する者三百餘人、芭蕉の遺徳の程も思はれた。墓は『枯尾華』に「門前の少し引入りたる所に、かたの如く木會塚の右に並べて土かいをさめたり。おのづから古りたる柳もあり、かねての墓の契りならんと、そのまゝに卵塔をまねび荒垣をしめ、冬枯のばせをを植ゑて名のかたみとす」と記されてある。今も義仲寺の境内にほどそのまの俤を残して居る。

附録 参考書目

芭蕉の研究に關する参考書目は、これを列擧するだけでも相當の頁數を要するであらう。更に讀者の指針として若干の解説を附するとすれば、優に本書と同分量の一冊を要する。實はさうした一冊の『芭蕉書誌』も、當然編纂されてよい筈である。しかし今は單に本書の附録として、比較的 주요な文獻のみをあげ、なほその中特に注意すべきものだけに、簡単な解題を加へる事にした。

(一) 傳記

○枯尾華 二冊 其角 元祿七年刊

芭蕉が歿した時の追悼集で、その巻頭に其角の筆になる「芭蕉翁終焉記」がある。芭蕉傳の根本資料とすべきものである。(俳諧文庫・其角全集・俳書大系・日本名著全集所収)

○芭蕉翁行狀記 一冊 路通 元祿八年刊

路通が三井寺で師の爲に編した追悼集で、これまた芭蕉傳の資料として重要な價值を有する。

(古俳諧文庫・俳書集覽・日本名著全集所収)

○笈日記 三冊 支考 元祿八年刊

芭蕉が舊遊の地に於ける遺詠、並びにその地の俳人の吟を集めたものであるが、芭蕉の病前死後の日記は、『枯尾華』の芭蕉翁終焉記と相俟つて、その臨終の狀を最もよく傳へて居る。(俳諧文庫・名著全集所収)

(俳書大系・日本名著全集所収)

○芭蕉翁全傳 一冊(稿本) 川口竹人 寶曆十二年奥書

伊賀上野の川口竹人がその師土芳並に兄景賢(俳號荻子)の口傳に基いて綴つた芭蕉傳で、芭蕉の傳記として纏つた最初のものである。しかもその資料が芭蕉の有力な門人の口傳に基いて居る點で、後世に成つたものではあるが、極めて確實性が多いと認められる。中には著者が藤堂家に關係がある爲に、却つて事實を隱蔽したかに疑はれる所もあるが、とにかく芭蕉の傳記研究上最も重要なものと言はねばならぬ。寶曆十二年の奥書があり、その頃に成つたのであらう。(古俳諧文庫・日本名著全集所収)

○芭蕉翁繪詞傳

三冊

蝶

夢

寛政五年刊

芭蕉の百回忌に當り、蝶夢は自ら翁の一生の傳記をものし、法橋狩野正榮に乞うて繪を加へこれを粟津芭蕉堂の影前に奉つた。その原圖を縮寫し傳を添へて刊行したものが即ち本書である。蝶夢は當時の最も忠實な芭蕉研究者で、本書も傳記としてよく要領を得、繪畫も面白いので汎く行はれた。明治以前の人々の芭蕉傳に關する常識は、本書から得たものが最も多いのである。(富山房袖珍文庫・俳諧叢書・日本名著全集所収)

○芭蕉翁略傳

一冊

遠藤貞松

寛政十年刊

紙數九葉の小冊子にすぎず、特に注意すべき資料も含まないが、とにかく一部の纏つた傳記としてあげておく。

○芭蕉翁正傳

一冊

竹二坊

寛政十年刊

竹二坊は伊賀上野の藩士で、藤堂家に傳へる資料等を探つて本書を成したといふ。竹人の『全傳』と共に伊賀關係の記録として注意すべきものである。(本書は後に豊山著の『晋子一傳録』と合輯し、『二翁正傳』と題して刊行されたものもある。)

○芭蕉翁略傳

一冊

岡野湖中

弘化二年刊

湖中の遺稿を西巷野集が校合して、芭蕉の百五十回忌に上木したものである。芭蕉の一生を年

代順に傳し、各年代の作になる發句を多く掲げてある。勿論今日から見れば杜撰の點も少くないが、概して穩健な説とすべきものである。別に附録一冊があるが、これは傳記とは關係がない。(勝峰晋風校訂『芭蕉翁略傳』と芭蕉連句評釋所収)

○芭蕉庵春秋

二卷(稿本)

葛飾素蓮

嘉永六年成

正保元年の芭蕉出生以下、年譜的にその一生を傳したものである。傳の本文には一々諸書に徴した詳細な考證を添へてある。明治以前に成つた傳記として、最も忠實な研究とすべきものである。たゞ遺憾な事には、今傳はる稿本は元祿元年九月の條までで、それ以後の分はなほ傳存が知られない。(萩原蘿月校訂『芭蕉庵春秋』所収)

○芭蕉翁全傳

(稿本)

松平去留

去留は因幡鳥取の城主松平冠山侯の俳號である。芭蕉傳として頗る異説に富むので注意されるが、根本資料としての確實性に乏しい。(原本未見。萩原蘿月氏の引用したものによる。)

○芭蕉桃青翁正傳記

五冊(稿本)

天堂一叟

年代不詳

卷一は竹人の『芭蕉翁全傳』の資料に基いた點が多いらしく、しかも『全傳』に抜抄の程度に止めた貞徳十三回追善百韻の全卷をあげてある等、参考すべき價値に富んで居る。なほ奥の細

道旅行中の會良の日記をも収めてあり、これは『青蔭集』所収の資料と同一で、同集よりも分量が多い。比較的世に知られない稿本であるが、他に見ない資料を含む點で重要視すべきものである。たゞし後半は『花屋日記』の如きをそのまま資料としてあり、採るべき所が少ない。

- 芭蕉庵桃青傳(俳諧文庫、芭蕉全集所收) 内田魯庵 明治三十年刊
- 明治になつてから出た芭蕉傳で、最も注意すべき最初のものである。もとより誤も少くないが、當時にあつては頗る苦心した著と思はれる。

- 芭蕉庵桃青 一冊 山崎藤吉 明治三十六年刊

明治時代に於ける芭蕉傳記の研究として最もすぐれたものである。たゞしその據つた資料を一明記してないので不便が少くないが、素蓮の『芭蕉庵春秋』はその有力な所據とされて居るらしい。同じ著者の『俳人芭蕉』(大正五年刊)は、本書を改題したものであるが、『芭蕉全傳』(昭和九年刊)は本書をもととして新たに改訂を加へてゐる。

- 芭蕉論稿 一冊 佐藤紅緑 明治三十六年刊
- 評芭蕉 一冊 天生目杜南 明治四十二年刊
- 芭蕉翁の面影 一冊 木津碩堂 大正十一年刊

- 芭蕉研究 一冊 樋口功 大正十二年刊

芭蕉の傳記のみならず、その俳風及び、變遷について詳論したもので、極めて忠實な學究的態度が見られる。後出萩原蘿月著の『詩人芭蕉』と共に、大正時代に於ける芭蕉傳記研究の白眉とすべきものである。

- 旅人芭蕉 一冊 萩原井泉水 大正十二年刊
- 續旅人芭蕉 一冊 同上 大正十四年刊
- 詩人芭蕉 一冊 萩原蘿月 大正十五年刊

資料の豊富と敘述の詳細な點で最も傑出して居る。たゞ説く所があまりに多岐に互つて、適確な論斷を逸する憾みはあるが、芭蕉研究者の必ず一讀を要すべき書である。終に俳諧七部集に關する論説を附してある。同じ著者の『芭蕉の全貌』(昭和十二年刊)は本書に補訂を加へたものである。

- 芭蕉亡命の一考察 一冊 菊山當年男 昭和六年刊

著者は伊賀上野の人で、専ら郷土史的立場から芭蕉の研究を續け、多くの新資料を學界に提供して居る。本書は芭蕉の亡命に關し、從來の俗傳を一蹴して最も傾聽すべき説を樹てたもので

ある。郷土史研究会講演筆記のパンフレットとして刊行された。なほ同氏が俳誌『鶏頭陣』昭和十三年一月號以降に連載中の「芭蕉と伊賀の俳壇」は、芭蕉傳として注意すべき新資料を多く含んで居る。

○芭蕉と伊賀 一冊 村治圓次郎 昭和八年刊

これも上野の郷土史研究会講演筆記の一である。伊賀を中心とした芭蕉傳で、資料の取捨宜しきを得、小冊子ではあるが参考とすべき點が少くない。

○問題の點を芭蕉の傳記の研究 一冊 志田義秀 昭和十三年刊

主としたる芭蕉の傳記中從來持に問題とされた點について、その解決を試みた研究である。資料として新たに加へたものはあまりないが、極めて精緻綿密な考證によつて、注意すべき多くの新見解に到達して居る。最近に於ける芭蕉傳記研究中の最も大きな收穫である。

(二) 作品

芭蕉の作品を収めた古俳書は、すべて研究上参考すべきものであるが、こゝには特に芭蕉の作品のみを集録したものをあげる。

○泊船集 三冊 風國 元祿十一年刊

第一卷に「芭蕉翁道の紀」(野ざらし紀行)、第二卷から第五卷までに芭蕉の四季發句五百二十二句を集録してある。なほ第六卷に芭蕉以下蕉門諸家の發句を収める。若干の杜撰も見られるが、芭蕉の遺稿を纂輯して、やゝ纏まつた體裁をなしたものの最初として、撰者の功を認めねばならぬ。(俳諧叢書所収)

○芭蕉句選 二冊 華雀 元文四年刊

芭蕉の發句六百七十餘章を四季に類別して収めてある。中には上欄に異同を註したのもあり、幾分考證的態度が見られるが、なほ他句の混入等も多い。(日本名著全集・大芭蕉全集所収)

○芭蕉句選拾遺 一冊 寛治 寶曆六年刊

泊船集・芭蕉句選の兩集に洩れた句一百廿餘章を四季に分けて収めてある。年代出所等を註記したのもあるが、年代には誤謬がかなり多い。撰者は俳書の刊行書肆として知られた京都の井筒屋の主人で、伊賀上野の窪田某から得た資料によつたといふ。(日本名著全集・大芭蕉全集所収)

○誹蕉句後拾遺 一冊 康工 安永三年刊

句選拾遺の遺を更に拾つたものである。なほ終に句選・句選拾遺の誤を正したり、芭蕉の句解

を試みたりして居る。たゞし他句の混入が非常に多く、杜撰の譏りを免れない。

○芭蕉翁發句集 二冊 蝶 夢 安永三年刊

自序によれば土芳自筆の年歴別にした芭蕉句帖をもとし、更にこれに漏れたものを加へたのであるといふ。その年代別とした點で劃期的の編纂であり、特に芭蕉直門たる土芳の句帖に基いたとすれば、極めて重要視すべきものではあるが、年代は必ずしも正確とは言ひ難い。(本書は別冊に四季類題別として安永五年に刊行されたものもある。内
容は殆ど異同はない。これは又寛政元年に再版された。)

○もと の 水 一冊 井上重厚 天明七年刊

芭蕉の遺吟・消息を収む。他書に見えない句が多いが、出所不明でそのままには信じ難い。

○風羅袖日記 二冊 素綾 寛政十一年刊

芭蕉の句八百六十餘章を年代別に収む。文化元年の後刷本には「芭蕉袖日記」と題してある。

○芭蕉翁發句類題集 一冊 松什 天保十五年刊

収むる句數千二百餘、題毎に年代を序し、諸書の誤をも正してある。

○芭蕉翁俳諧集 三冊 蝶夢 安永五年成、天明六年刊

芭蕉の連句集として見るべきものの最初である。年代順に排列してあるが、延寶時代の百韻な

どはその一部分だけしか掲げてなく、又重要な作品で漏れたものも少くない。

○幽蘭集 七冊 加藤曉臺 寛政十一年刊

冬の日以後の連句二百二十卷を年代順に集めてある。断片的の資料までよく網羅してあるが、杜撰な點も往々見出される。

○金蘭集 二冊 甘井 文化三年刊

もと金澤の萬子の輯録したものを傳へたのだといふ。随つて比較的信憑するに足る。

○芭蕉袖草紙 三冊 奇淵 文化八年刊

芭蕉一代の連句を年代順に排列し、かつすべてその出所を明記してある。中には今日傳存を知り得ない出典もあり、その點で貴重な資料とされる。

○芭蕉文集 三冊 小林風徳 安永二年刊

芭蕉の遺文集として纏まつた最初のものである。(二冊本は後刷。)

○諧蓬菜島 三冊 高桑蘭更 安永四年刊

天卷には芭蕉の連句三卷と詞書ある句十一章、地・人二卷に松島賦以下の文章卅四篇を収む。

○芭蕉翁文集 二冊 蝶夢 安永五年刊

土芳の芭蕉文選をもととし、なほ之に漏れたものを集録した由が自序に見える。收むる所文章・紀行共三十九篇に及んで居る。(日本名著全集所收)

○蕉翁消息集 一冊 高桑 蘭更 天明六年刊

蘭更の寓目した芭蕉の書簡二十五通を收む。一々その所持者の名を附記してある。(日本名著全集所收)

○俳諧一葉集 九冊 佛兮・湖中 文政十年刊

芭蕉の發句・連句・紀行・文章・消息・句合評・遺語等を集録したもので、芭蕉全集の嚆矢として編者の功は没する事が出来ない。(明治年間に二種の翻刻があり、又大正十四年刊勝峰晋風校訂の『芭蕉一葉集』も本書の翻刻である。)

○俳諧袖珍鈔 十三冊 黙 池 嘉永五年刊

前者について出た芭蕉の全集で、體裁もほと前者にならつて居る。

○纂芭蕉翁一代集 一冊 花の本秀三 月の本素水 明治二十四年刊

發句・紀行・文章・消息の四部に分ち、連句は收めてない。頭註並に異同を附し、なほ若干出典を註した點が注意される。

○芭蕉全集(俳諧文庫) 一冊 永機・雪人校訂 明治三十年刊

貝おほひ以下芭蕉關係の俳書を翻刻し、終に句集と文集とを附してあるが、句集は一葉集の發

句部をそのまま用ひてある。

○芭蕉翁全集(俳諧叢書) 一冊 佐々醒雪 巖谷小波 校訂 大正五年刊

芭蕉翁繪詞傳・泊船集・俳諧七部集・俳諧續七部集・俳諧七部拾遺を翻刻したもので、嚴密な意味では芭蕉の全集とは言ひ難い。

○俳聖芭蕉全集 吉木 燦 郎 大正九年刊

○芭蕉全集 一冊 沼波 瓊 音 大正十年刊

資料についてはなほ考證の粗漏を免れないが、一々出典を記し年代を考へ、かつ異同を註して居る點で、劃期的な編纂だと言はねばならない。一葉集の不備はこゝに補はれ、眞に全集の名に背かない實を具へるに至つた。なほ本書は後に費川他石の校訂になる改訂増補版が出て、誤謬を正し遺漏を補つた所が多い。

○年代鑑別芭蕉俳句定本 一冊 勝峰 晋 風 大正十二年刊

芭蕉の俳句を年代順に排列し、出典並に異同を註したものである。最も古い出典に溯つてその確實性を證し、年代推定上有力な憑據を與へた點で注目すべき勞作である。

○芭蕉全集 石原 健 生 大正十四年刊

○芭蕉一代集(俳書大系所収) 一冊 勝峰晋風 大正十五年刊
 資料に對する涉獵が汎く考證の精密な事は、從來の全集類に比して非常な進歩を示して居る。
 沼波瓊音の芭蕉全集と共に大正年代に於ける芭蕉作品の集大成として、最もすぐれた功績を認
 むべきものである。

○芭蕉全集(日本古典全集所収) 二冊 與謝野寛 大正十五年刊

○芭蕉全集(日本名著全集所収) 一冊 費川他石 昭和四年刊

芭蕉の作品以外に蕉門の重要な俳書並に芭蕉傳の参考書をも收めてある。極めて忠實な態度で
 編纂され、校訂も行届いて居る。

○芭蕉連句集(岩波文庫所収) 一冊 小宮豊隆 昭和五年刊

芭蕉の代表的な連句七十九巻を選び、その出典によつて嚴密な校訂を施したものである。

○新芭蕉一代集 四冊 勝峰晋風 昭和六年刊

俳書大系所収の芭蕉一代集を補訂したもので、新しい資料も加はつて居る。

○校芭蕉俳句集(岩波文庫所収) 一冊 穎原退藏 昭和七年刊

芭蕉の俳句を類題別に排列し、その確實な出典を出来るかぎり汎くあげ、かつ異同を註したも

のである。なほ附録として疑問の句、誤傳の句を一括して掲げてある。(穎原退藏著「俳諧史の研究」所
 載「芭蕉雜考」同人著「俳諧史
 論考」所載「芭蕉俳句出典考」には、この附録の部分について判明した所を
 補説してあるが、なほその後の研究で本文・附録とも補訂すべき點が多い。)

○芭蕉書簡集(岩波文庫所収) 一冊 勝峰晋風 昭和九年刊

芭蕉の書簡三百三十一通を集めたもので、その蒐集の勞は最も多とせねばならぬ。たゞし眞偽
 の鑑別についてはなほ十分でない所が見られる。

○大芭蕉全集 十二冊 山田三子等 昭和十年―十一年刊

第一・二卷俳句篇、第三・四・五卷連句篇、第六卷俳文篇、第七卷紀行篇、第八卷評語篇、第
 九卷俳論篇、第十卷書簡篇、第十一卷補遺篇、第十二卷索引語彙篇から成り、すべてにわたつ
 て詳しい註釋・解説を附してある。全集としての組織體裁は最も完備したものであるが、内容
 は編纂者によつて甚しく優劣があり、就中俳句篇は芭蕉句選・芭蕉句選拾遺をそのまま用ひて
 註したにすぎず、全集の名に副はない憾みがある。たゞし萩野清分擔の評語篇・書簡篇は註釋
 と考證とに最もすぐれ、松本義一・中村俊定分擔の連句篇・俳論篇も註釋・解説に新研究とし
 て見るべきものが多い。

(三) 註 釋

○芭蕉翁發句評林 一冊 杉 雨 寶曆八年刊

芭蕉の發句八十七章を註したもので、芭蕉の纏まつた句解書としては最も古い。(俳諧叢書所收)

○芭蕉句解 二冊 大島 蓼 太 寶曆九年刊

著者が俳壇的に勢力のあつた人だけに、古くから汎く行はれたものである。

○師走 一冊 正月 堂 明和元年刊

註は比較的詳しいが僻説が少くない。

○貞享正風句解傳書 五卷(稿本) 堀 麥 水 明和七年成

その第四卷に芭蕉の發句三百章をあげ短註を附してある。(麥水俳論集所收)

○芭蕉句解 五冊(稿本) 東海 吞吐 明和六年成

收むる句數が多いのと、註の比較的詳しいのとで、早い頃の註釋書として注目される。説にも

採るべき所が少くない。最後の一冊は著者の句集である。

○芭蕉翁發句解 說叢 大全 五冊 葛 飾 素 丸 安永二年刊

前の評林以下三書の説をあげて、これを夫々批判して自説を述べたものである。著者としては頗る力を用ひたさまが見られる。(俳文學大系所收)

○俳諧金花傳 二冊 尾崎 康 工 安永二年刊

支考の傳と稱する金花傳をもととして、更に諸家の説並に自家の見を加へたものである。

○蕉翁過 去 種 四冊(稿本) 鷗 洲 安永五年成

著者が芭蕉の發句に一と脇を附け、かつ註を附したものである。

○蕉翁發句 茜 掘 一冊 梅 丸 天明二年刊

註した句數五十餘。古人の説があるものは一とこれをあげ、なほ自説を添へてある。本書は初篇であるが、二篇以下は刊行されなかつた。(俳諧叢書所收)

○朱 紫 二冊 越 谷 吾 山 天明四年刊

後に評林・茜掘と共に『芭蕉翁發句諸抄大成』(五冊、文政七年刊)と題して刊行された。(俳諧叢書所收)

○芭蕉發句集說 四冊(稿本) 幹 貞 寛政七年成

註は自説として見るべき所はないが、一と出典を記し、前人の説その他句解に参考すべき資料

を集めてある。(未刊國文古註
釋大系所收)

○笈の底 八冊(稿本) 信天翁 信胤 寛政七年成

註解した句数も多く、語句の出典等を説くことも頗る詳密であるが、直接句解と關しない故事等を、徒らに博引する弊がある。(未刊國文古註
釋大系所收)

○増註 桃青翁句彙 一冊 巢居・于當 寛政十年刊

註は句意全體を解くのでなく、たゞ解を助くべき詩歌文章を引用したものである。

○芭蕉翁發句集蒙引 四冊 衛足(杜哉) 享和元年刊

詩歌古典の引用のみことぐしい註と異り、句の眞意をよく捉へた解が多く、頗る参考すべきものであるが、著者が出羽の邊陲の人であつた爲か、從來あまり世に知られて居ない。註した句数もかなり多い。(本書寫本として傳はるものは寛政十一年の序文があり、刊本との異同も少なくない。恐らく刊行するに際して、稿本のまゝで刊行に至らなかつたので、稿本のみか、姑く疑を存しておく。)

○蕉句雙説 二冊 花 萊 享和二年刊

去來と素丸との句解によつたものだといふが、それは去來抄と説叢大全の説らしい。

○桃青翁句彙後編 一冊 巢居・于當 文化三年刊

前掲『桃青翁句彙』の後編で、體裁も全く同一である。

○芭蕉句選年考 九卷 石河積翠 年代不詳

華雀編の『芭蕉句選』の句々について、その出典とすべき諸書を引用して作句年代を考定し、なほその句に關する評論註解として参考すべき文獻を汎く涉獵し、最後に自説をも述べてある。資料の博搜考證の精密な事は從來にその比を見ないばかりでなく、今日もなほ學者にとつて重要な参考書たる價值をもつて居る。(明治四十四年大野西竹・沼波愛音の校訂で翻刻され、昭和四年更に博文館叢書の一冊として刊行された。)

○俳諧松の風 一冊 松山胡蝶 文化三年刊

附言によれば茂蘭の『膝元去らず』(明和二年稿本)の説によつた所が多いらしい。

○芭蕉句解参考 二冊 高柳莊丹 文化四年刊

蓼太の『芭蕉句解』によつて更に私見を加へたものである。(文化四年の跋があるものでその年の刊行と推定される。後ち又文化八年『三家發句解』の中に加へて刊行された。)

○芭蕉翁句解大成 五冊 茂呂何丸 文政十年刊

内題には「芭蕉翁句解参考」とあり、もとの名で刊行されたものらしく、版を重ねる毎に増補して行つたものと思はれる。收むる句数千二百餘、引用書目百七十餘、『七部大鏡』と共に何

丸が心血を注いだ大著であるが、その割合に取るべき所が少い。かつ芭蕉の句として疑はしいものも多く混入して居る。

○芭蕉俳句評釋 一冊 内藤鳴雪 明治三十七年刊

『俳句入門叢書』の第四篇である。大正二年に寒川鼠骨の『續芭蕉俳句評釋』が出た。

○芭蕉句集講義 四冊 角田竹冷 明治四十一—四十二年刊

竹冷その他の人々の輪講筆記である。

○芭蕉俳句研究 一冊 小宮豊隆等 大正十一年刊

○續芭蕉俳句研究 一冊 同上 大正十三年刊

○續々芭蕉俳句研究 一冊 同上 大正十五年刊

以上三書は小宮豊隆・太田水穂・阿倍能成・和辻哲郎等の共同研究で、清新な鑑賞と批判が見られる。

○芭蕉俳句新釋 一冊 半田良平 大正十二年刊

○芭蕉句集評釋 一冊 小林一郎 大正十三年刊

○選評 芭蕉句集 一冊 樋口功 大正十四年刊

○芭蕉句集新講 二冊 服部咄石 昭和七年

芭蕉の發句全部に互つて註釋したもので、制作の年代順に排列してある。

なほ最近雑誌『俳句研究』に連載中の頼原退藏の「芭蕉俳句新講」、及び『解釋と鑑賞』に連載中の志田義秀の芭蕉俳句の解説は、註釋としては最も詳密なものであるが、共にまだ完結に至つて居ない。『奥の細道』を始め紀行・文章の註釋は、本文篇に附説しておいたから省略する。連句の註釋書は七部集を中心として、古くからその數が頗る多いので、紙數の都合上今一と列舉する事が出来ない。その中最も注意すべきものをあげれば、

○冬の日註解 二冊 升 六 文化六年刊

○七部集大鏡 七冊 茂呂何丸 文政六年頃刊

○七部婆心錄 六冊 原田瓢子(曲齋) 萬延元年刊

等である。(第一は古俳書文庫に第二・第三は俳諧叢書俳文學大系等に収められてある。)又近時刊行されたものでは、

○冬の日抄 一冊 幸田露伴 大正十三年刊

○芭蕉の連句 一冊 樋口功 大正十五年刊

○春の日・曠野抄 一冊 幸田露伴 昭和二年刊

- ひさご・猿蓑抄 一冊 同 上 昭和四年刊
 - 炭俵・續猿蓑抄 一冊 同 上 昭和五年刊
 - 芭蕉連句の根本解説 一冊 太田水穂 昭和五年刊
 - 芭蕉俳諧研究 一冊 小宮豊隆等 昭和四年刊
 - 續芭蕉俳諧研究 一冊 同 上 昭和五年刊
 - 續々芭蕉俳諧研究 一冊 同 上 昭和六年刊
 - 新續芭蕉俳諧研究 一冊 同 上 昭和八年刊
- 等がある。

(四) 評論その他

芭蕉俳諧の特質を考察する上に必讀の書として、『去來抄』・『三冊子』・『青根が峯』・『旅寝論』等がある。江戸時代の寫本・板本の外、前に掲げた芭蕉全集類に收められ、又單行本としていづれも翻刻されて居る。最近出た

- 去來抄・三冊子・旅寝論(岩波文庫所收) 一冊 穎原退藏校註 昭和十四年刊

は、最も信憑すべき本文によつて居る。なほこの項目に於いてあぐべき書目は頗る多いが、特に纏つた評論として、

- 芭蕉俳諧の根本問題 一冊 太田水穂 大正十五年刊
 - 芭蕉の研究 一冊 小宮豊隆 昭和八年刊
- をあげるに止めて置く。その外
- 日本文學大辭典 四卷 藤村 作編 昭和七―十年刊
 - 日本文學講座 新潮社 大正十五―昭和三年刊
 - 岩波講座日本文學 岩波書店 昭和六―八年刊
 - 日本文學講座 改造社 昭和八―十年刊
 - 俳句講座 十卷 同 上 昭和七―八年刊
 - 續俳句講座 八卷 同 上 昭和八―九年刊

の中には芭蕉に關して参考すべき論考が多い。その他雜誌等の定期刊行物に發表された論文には、注意すべき研究がなほ少くないが、今すべて省略する事にした。

昭和十四年六月十五日印刷
昭和十四年六月二十日發行

日本古典讀本10・芭蕉奧付
定價壹圓五拾錢

(青木製本)

著者 穎原退藏

發行者 東京市京橋區京橋三ノ四
鈴木利貞

印刷者 東京市神田區錦町三ノ二
白井赫太郎

發行所 東京市京橋區京橋三ノ四
株式會社 日本評論社

電話京橋六一九一—四
振替東京一六

(刷印社興精)

卷二十全 本讀典古本日

| | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|--------|----------|----------|---------|---------|----------|--------|----------|------------------|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 現 | 近 | 芭 | 西 | 謠 | 徒 | 平 | 新 | 堤 | 枕 | 源 | 萬 |
| | | | | | 然 | 家 | 古 | 中 | 草 | 氏 | 葉 |
| | | | | | | 物 | 今 | 納 | 子 | 物 | 集 |
| 歌 | 松 | 蕉 | 鶴 | 曲 | 草 | 語 | 集 | 語 | 子 | 語 | 集 |
| 大阪府立女專教授 | 武藏高等學校教授 | 前京都帝大助教授 | 法政大學教授 | 東京音樂學校教授 | 東京女子大學教授 | 千代田女專教授 | 立命館大學教授 | 文部省圖書監修官 | 二松學舎教授 | 東京女子大學教授 | 東京帝國大學教授 文學博士 |
| 石山徹郎 | 重友毅 | 瀨原退藏 | 近藤忠義 | 風卷景次郎 | 西尾實 | 永積安明 | 小泉苓三 | 倉野憲司 | 鹽田良平 | 石村貞吉 | 久松潜一 |

ふとじは既刊

747
185

終